MAGAZINE FOR WORLD MOVIE FANS

スクリーン

1月号 臨時増刊



キングコング大特集号

昭和52年1月15日発行 毎月1回1日発行 昭和22年4月24日第3種郵便物認可 第32巻第2号通巻421号 昭和51年3月26日国鉄首都特別扱承認 雑誌第2662号 昭和51年12月3日国鉄首都増刊号承認第9619号

世紀の巨編のすべてを徹底特集!!

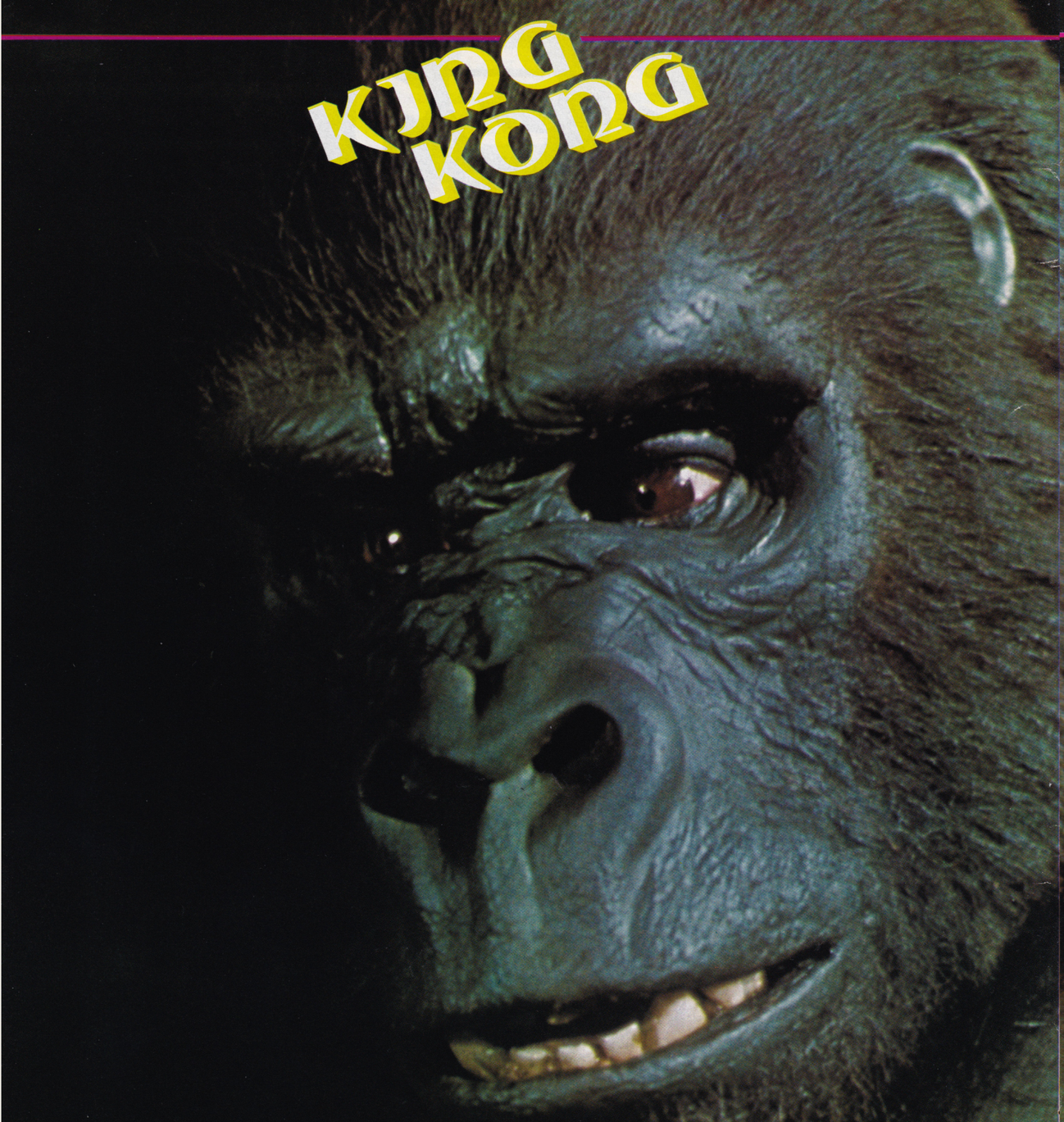
★ポスターとレコード大プレゼント!★

恐怖のキングコングが遂に日本へやって来た！





KING KONG



キングコングのふるさとは、太平洋に浮かぶ名もない孤島だ。その島でコングは、原住民の守り神として自由気ままに生きてきた。

だが、心ない白人たちによって、初めて見る文明社会に引っぱり出された。麻酔で眠らされ、見世物になっていたコングが目ざめた時、世界最大の都会ニューヨークは恐怖のどん底にたたきこまれた。

身長20メートル、体重6・5トンもの巨獣は怒り狂い、暴れ回わった。

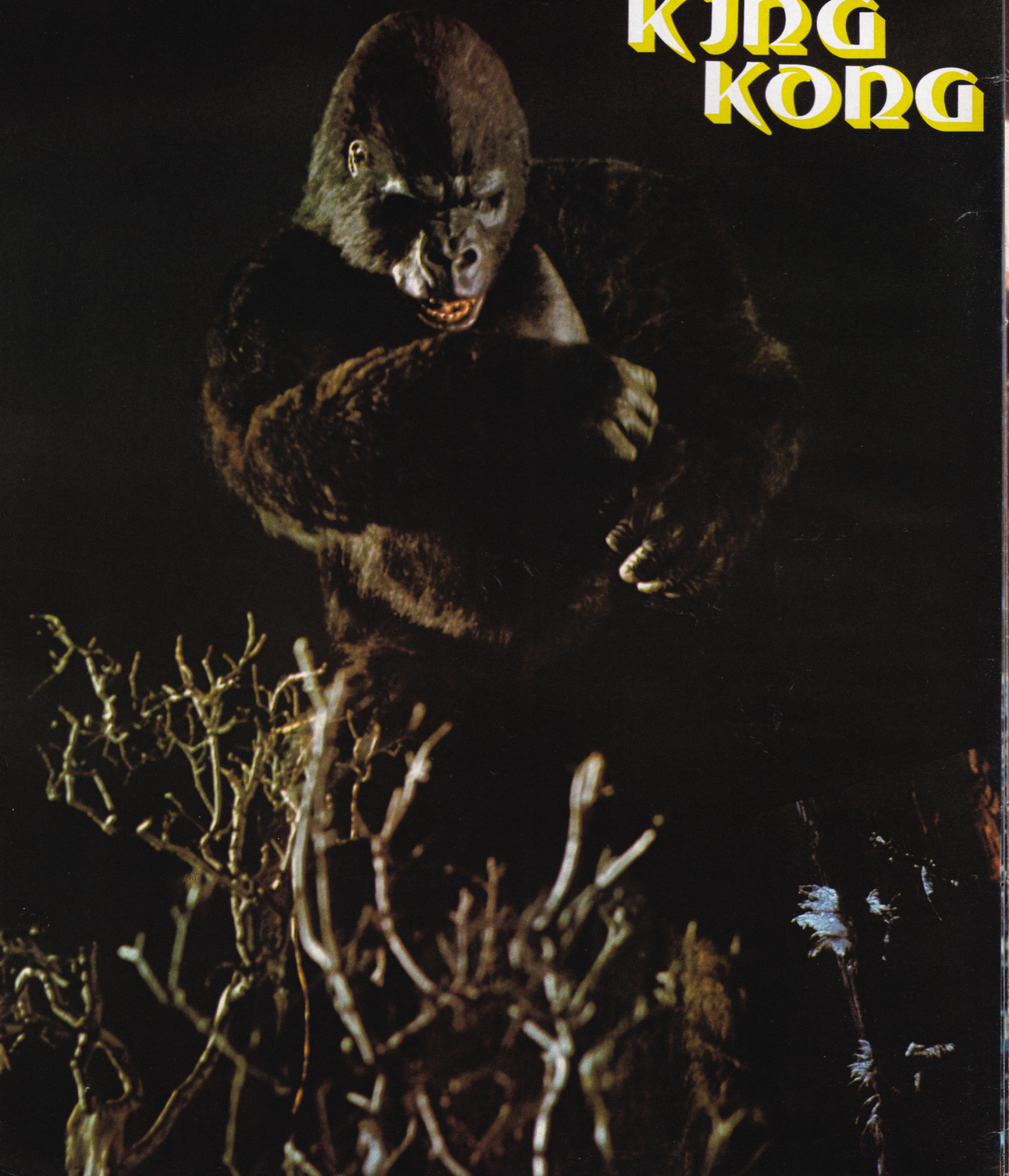
タタミ6枚分もある手のひらが宙を切ればどんなビルだってめちゃめちゃだ。あの高見山の10倍もある厚い胸を怒りにふるわせれば、ミサイルだってビクともしない。

コングは強い！　ゼッタイ強い！



「キングコング」

KING KONG



カラー

ハイライト 第1部







南海の孤島スカル――油田調査にやってきたウイルソンらと漂流中に

助けられたドワンたち一行は、巨大な怪獣キングコングの出現にドギモを抜かれた。

ドワンは香港へ映画出演のため向かう途中、船が難破し、助けられてこの島へ来たのだが、そのドワンがなんと、コングにさらわれてしまったのだ。巨大な手のひらに握られた彼女の運命は、危機一髪、まさに風前のともしびだ！

KING KONG



KING KONG

しかし、コングは意外にやさしかった。あの凶暴なコングがどうして？　恐怖からさめたドワンは、コングが自分をまるで花嫁のように扱ってくれるのを知って、ビックリした。









KING KONG

コングはジャングルの王者だ。しかも美しいドワンがいる。コングは楽しそうだった。だがある時、ドワンを狙って大蛇が襲って来た。二匹の巨獣は大地を鳴らして死にもの狂いの戦いを展開した。

KING KONG

ウイルソンはコングを使ってーもうけしよ
うとたくらみ、一計を案じてコングを捕ら
えることに成功した。薬で眠らされたコン
グは、大型タンカーでニューヨークへ。

KING KONG

ニューヨークのシア・スタジアムに作られた特設会場にコングは立っている。ロック・バンドがわめき花火がKONGの文字を夜空に輝かせる。数万の観客がつめかけ、コングは人々の注目を一身に集めた



キングコング

話題独占！ジョン・バリーの最高傑作遂に登場!!
〈オリジナル・サウンドトラック盤〉



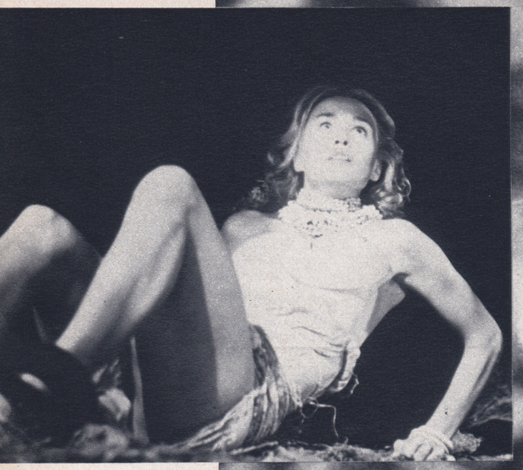
●〈LP〉YX-7032 ￥2,500/豪華カラーポスター付/キングコングの叫び声入り！
●〈シングル〉YT-4010 ￥600/セリフ・キングコングの叫び声入り！
●〈カセット〉TYC-4001 ￥2,600 ●〈カートリッジ〉TYP-3001 ￥3,000

〈ガオーはキングコングの合言葉〉DT-4103 ￥600/唄■子門真人
〈ソウル・キングコング〉YT-4011 ￥600/演奏■キングコング・ハンターズ

TAM 発売元■東宝レコード株式会社 東宝 RECORDS



脚光を浴びるコング——だが、ドワンはそんなコングを悲しそうな目でみつめていた。





ここが「キングコング」の見どころだ！

双葉十三郎

一九三三年、ニューヨークのエンパイア・ステート・ビルの頂上から、戦斗機の猛射によって墜落、哀れな最期をとげて以来、世界の映画界の伝説的存在になっていたあのキング・コングが、いま一九七六年の最新技術によって華麗によみがえった。待ちに待ったその日、ぼくは興奮をおさえるのに苦労しながら試写室に入った。以下は見たままの御報告である。

まずお色気の船旅を楽しもう

場面はスラバヤの波止場、ペトロックス社の石油採掘船が資材を積みおえていよいよ出発というとき、一人の若い密航者がもぐりこむ。この新しいコング映画が苦心した一点は、前作のストーリーをいかに現代的につくりなおして新しい趣向を織りこむかということであったようだが、前回は最初から巨猿の存在をかぎつけていたプロデューサーが、映画をつくるつもりで食べるのに困っている女優をひろって同行するという発端だったのに対し、今回は石油会社の責任者ウィルスン（チャールズ・グローディン）が、いつも霧に包まれている伝説的な島を求めて航海するという冒険ロマン的な魅力が、まずぼくたちをひきつける。密航青年のジェフ・ブリッジスがじつはプレスコットという動物学者と判明するあたりもスパイ映画的サスペンスの要素が織りこまれている。そしてゴム・ボートで仮死状態のままただよっていたジェシカ・ラングの無名女優ドワンが発見されることになるのだが、この航海中の場面で、彼女の魅力がコングと一緒に映画を支える重要な役割にあることがハッキリする。香港でポルノ映画に主演する予定だったらしいのだが、まさにそれらしい感じのお色気で、さすが実生活は人気モデルというだけあって、瞬間瞬間のポーズがとても魅力的である。









前回が黒白であったのに対し、今回はカラーであることが絶大な強味になる。海の色にしてもそうだが、ジェシカの魅力もカラーのおかげでぐんと引立ち、この航海中の場面は彼女が主役のお色気エンターテインメントとして楽しめることになったのである。

■■ついにコング登場！■■

かくて映写開始後四十三分、船の前方に謎の霧があらわれる。いよいよあの島だ。先発隊がボートでその霧の中へ突っこんでいくあたりは秘境探険ドラマ的な楽しさがいっぱいである。島を発見して上陸、海辺でジェシカがモデル的魅力を大いに発散するというおマケもついて、奥地へふみこむと、なんと木でつくった巨大な城壁のような柵にぶつかる。そして土人たちの奇怪な儀式の踊り。ついにコングが登場か、とぼくたちの興奮も次第にたかまってくる。

が、あと十五分ほどお待ちあれ。一同が引きあげた母船へ土人たちが小舟でしのび寄りドワンをさらう一幕がはさまるからである。そして土人たちが巨大な柵をひらき、外の祭壇にドワンをしばりつけたところですごい地響がきこえはじめ、お待ちかねコングが巨大な姿をあらわすのである。

このコング出現から音響効果がすごい威力を発揮しはじめる。ここ三十数年間、映画の撮影や音響効果の技術的進歩はめざましい。その進歩がこの新しいコングに結集しているわけで、コング自体もヌイグルミ方式とリモコン方式を織りまぜて、どうしてもギクシャクする前回の人形アニメ方式とはちがったスムーズな効果を出している。コングの表情が前回よりもはるかに豊かになったことも今回の特色であるが、この表情の豊かさが美女と野獣のドラマに大きな役割を演じはじめる。前回、フェイ・レイが扮したヒロインは悲鳴ばかりあげていたが、今回はコングとドワンの気持の交流が、ぐんとこまかく表現されることになったのである。

■■美女と野獣のエロティシズム■■

ドワンを手に握ったコングは山奥へ去っていく。その巨大な足跡を、プレスコットたちが尾けていく。ドワンは岩かげのくぼ地のようなところに寝かされている自分を発見する。気がつくと、眼の前にすごくでかいコングの顔がある。逃げようとすると城壁のような手のひらでさえぎられる。ここがまた見せ場であるが、面白いのは彼女が居直って、食べたいならはやく食べて頂戴と、コングの鼻をなぐりつける。と、コングはくすぐったそうな表情をして口のあたりをなでて、それから彼女を手のひらにのせ、滝のほうへつれていく。

このあたりから、ポルノ女優でもいいからスターになりたいという設定が大いに生かされる。コングは手のひらにのせた彼女に滝をあびさせたうえ、滝壺にほうりこみ、泳いで浮んできたところをひろいあげて手のひらにのせ、乾かすつもりで息をふきかける。その息で、ドワンは次第に恍惚たる表情になっていくのである。

追ってきたプレスコットたち数名は深い谷にかかった太い丸木橋を渡ろうとする。と、コングがあらわれ、その丸木橋を動かし、人間たちはつぎつぎに谷底へおちていく。ここも見せ場であることはいうまでもないが、あやうく崖の途中のくぼみにとまったプレスコットをコングが指さきでつまえようとするところもサスペンスが盛りあがる。

コングが指さきでドワンが土人たちに儀式用につけられた胸飾りをひきちぎり、さらに首飾りをとり、着ているものの上部を剝ぐというとても奇妙な感じのストリップもあり、美女と野獣のエロティシズムが強調されるうちに、巨大なガラガラ蛇が来襲する見せ場になる。前回は巨大な怪鳥で、あっさりコングに退治され、口を裂かれクチバシがパクパクになってしまうが、今回はなかなか強くコングにまきついて死斗を展開する。ドワンがこの騒ぎのスキにプレスコットに救われ逃げるが、そのあと、土人の部落でウィルスンがコングをつかまえようと準備をととのえているところからがまた強烈サスペンスの見せ場になる。ドワンをとりもどすためにやってきたコングが柵の扉をこわす場面が音楽効果も盛大で圧倒的。押し破ったとたんに大量のクロロホルムにやられ、ドライアイスみたいに低くただよう白い霧に包まれておれる光景は非常にドラマティックである。コングは美しいものを愛し、そのおそろしい表情もドワンを見るたびにやわらかく変り、彼女のほうもコングが自分に危害を加えないと知ると、こわいながらも次第に愛情がめばえてくる。が、ウィルスンは非情な文明社会の代表である。コングの心情などはどうでもいい。ニューヨークへつれ戻って、マスコミに利用したいだけである。ここからコングの悲劇的なムードがつよまってくる。

■■コングいよいよあばれる！■■

コングは巨大なタンカーの船倉に監禁される。ウィルスンはドワンにコングと共演さればスターになれるといって契約を迫る。プレスコットはこの巨猿も自然の中に放置しておいてやりたい気持で、ドワンが残酷な見せ物の片棒をかつぐことにも反対である。が、ドワンはコングに同情する気持と念願のスターになる機会を逃したくない気持との板ばさみになってしまう。ここにこの映画のドラマ的なポイントの一つがあるのだが、プレスコットと甲板でラヴ・シーンを演じている彼女のスカーフが風で飛び、船倉の天井の格子から入ってコングの胸の上に舞いおち、コングが怒ってあばれはじめる。という一幕のジョン・ギラーミン監督の描写はなかなかうまい。

ドワンはコングの怒りをしずめるため、格子の上からよびかけるが、足をふみ外して船倉へ墜落する。すごく高い船倉なのが非常に効果的であるが、その彼女をコングはうけとめてやる。そして彼女の言葉をききわけたらしく、高い梯子を登って去っていく彼女を見送ると、やすらかな眠りにつく。巨大なるものの哀れさいじらしさが、この船倉の場面で深くぼくたちの胸にしみてくる。

この船倉の場面が終ると、映画は一気にクライマックスへと突入する。三十分間にわたる強烈な災害スペクタクルであり悲愴な巨猿最期のドラマである。













ここはニューヨーク。前回は劇場だったが今回はスタジアムで、華やかなパレードがくりひろげられるうちに、ドワンとウィルスンがヘリコプターで到着する。ドワンのジェシカ・ラングはこのシーンですばらしいドレスをまといファッション・モデル的な魅力をフルに発揮する。彼女は土人たちにつかまっていけにえにされたときと同じように祭壇にあがる。その眼前に巨大なコンテナーが押し出されてきて、四角い塔のような覆いがあがると、手足を金属のカセでおさえられたうえ檻にかこまれたコングがあらわれる。その頭には王冠がかぶせられている。まさにキング・コング！世紀のショウである。

記者団が祭壇のドワンに殺到する。日本ならもっとすごいだろうが、彼女は彼らにもみくちゃにされる。それを見おろすコングは彼女がいじめられていると思い大いに怒り、手カセをひきちぎり檻をへしまげ、さらに足カセもぶちこわしてあばれだす。逃げ散る群衆、ドワンはプレスコットと一緒に脱出する。ウィルスンは怒りに燃えたコングに踏みつぶされる。コングはドワンを探しもとめる。スタジアムの高い外廊からのぞくと、下のほうの街路は逃げまどう人たちやクルマがいっぱい。このコングの鳥瞰ショットが効果的である。

ドワンとプレスコットは高架電車に乗りこむ。ところがスタジアムをおし破って出てきたコングもこの高架線のところへやってきて、走ってくる電車の前に巨大な顔を出す。運転手が仰天する間もあらばこそ、コングは線路をへしまげ、架線をちぎって火花をちらし、電車をひっつかんでオモチャのように投げすてる。プレスコットとドワンは間一髪のところを逃れるのだが、ここは技術の進歩のおかげで前回にまさる大きな見どころになっている。

かなりのところまで逃げのびて、ドワンはなにか飲みたいと呑気なことをいい出す。プレスコットはみんな逃げてガランとしたクラブへ一緒に入るが、その前にちょっと空をあおぐと、あの島で見たと同じような美しい満月をバックに、世界貿易センターの超高層ビルがそびえたっている。これがなかなかの着想で、クラブに入ってからプレスコットはこのビルの風景があの島のコングのいた岩山の風景に似ていることに気がつき、警備本部に電話し、コングはこのビルにくるにちがいないから空中からネットでからめとることにして絶対に殺さないでほしいと頼む。前回のコングはなぜエンパイア・ステート・ビルに登るのかよくわからず、逃げ場を失った狂人みたいな感じだったが、今回は右のように理由づけしているところが合理的である。そして彼が別室で電話しているのを待っていたドワンは、入口からさしこまれたコングの手につかまれてしまう。さア、ここからが巨猿伝説の最後の最高の見せ場である。

■■■壮絶！コングの最後■■■

彼女を片手につかんで、コングは貿易センターの超高層ビルの外壁をよじ登っていく。プレスコットは内部のエレベーターに乗って追う。ビルの前の広場はもう攻撃陣のクルマや人の洪水である。屋上にたどりついたコングは三人の攻撃隊員に火炎放射機で攻撃される。どうやら警備本部にはコングを生捕りにするつもりはないようである。生捕りにして島へ帰してやりたいために通報したプレスコットは地団駄ふむがあとの祭りである。

コングは隣の高い屋上へ飛び移り、附属の建造物をちぎって火炎放射機の三人に投げつけ大爆発をおこさせる。と、今度は三台のジェット・ヘリがあらわれる。コングはドワンを安全な物かげにおろす。彼女は私を放さないでと叫ぶ。コングが自分を持っているかぎりジェット・ヘリは攻撃を躊躇すると判断したからである。が、コングは彼女を置いたまま、敢然と空からの敵にたち向う。猛烈に弾丸をぶちこまれて血みどろになるが、それでも一機をたたきおとす。そして攻撃側がひと息ついている間に、ドワンに手をのばす。彼女は早く私を持てという。が、手をさしのべたのは別れの挨拶だったようである。コングは再びジェット・ヘリにたち向い、一機はビルの外壁にぶつかってしまうが、コングも力尽きて一段下の屋上のふちにおち、ドワンが必死によびかけるうちに、はるか下界の地上めがけて墜落していく。

前回のコングも飛行機でやられ墜落し最期をとげて場面が哀れをさそった。が、今回はその哀れさがさらに強調されている。ドワンのコングを救けたいという気持が非常につよく描かれている結果、彼女をかばいながら殺されていくコングが一段と悲愴に感じられるのである。この場面を見て泣かずにはいられなくなるファンも多いのではないかと思う。

広場におちて息たえていくコングの巨体を群集がとりかこむ。カメラマンたちが登ってフラッシュをたく。かけ寄って号泣するドワンを記者たちがとりかこむ。人垣の外からプレスコットが彼女をよぶ。が、容易に近づけない。彼女も彼のほうへ行こうとするが、包囲した連中からぬけられない。カメラはゆるやかに上方へ後退し、コングの巨体とそれをとりかこむ群集をロングで見おろす。そして約二時間十五分の映画は終りをつげる。

ことさらにドワンの悲痛な表情のクロース・アップを強調しながら描かれたこのコング臨終のシーンだけでもわかることだが、前回がクラシックな奥床しさを感じさせたのに対して、今回はアメリカ文明批判の角度がつよく匂う。製作者ディノ・デ・ラウレンティスはイタリアの人であり、アメリカ映画を製作するようになってからも「マンディンゴ」のように奴隷制度の南部というアメリカの過去の恥部をあばいた作品をつくっている。今回もアメリカのマスコミのセンセーショナリズムと非情さを前回のように無邪気にではなく外国人の眼で批判的にぐっと強調しているように見える。しかし、同じつくり方なら二度つくる必要はない。そこに現代の「キング・コング」としての新しい存在理由が見出されるのである。

見どころは以上のとおりである。が、出演者についても一言ふれておくと、ジェシカ・ラングは前回のフェイ・レイとまったくちがう性格をうち出して面白く、演じたドワンと同じように一躍スターの座につくことになるかもしれない。お相手のジェフ・ブリッジスはいままでの出演作品とはちがった扮装でヒューマニストらしい味もよく出している。ウィルスンのチャールズ・グローディンは日本の商社アニマルを連想させて苦笑をさそう。しかし誰もが巨大なコングの前では小さな人間でしかない。おお、偉大なるキング・コングよ！







映画物語

キングコング

東和男

南海の孤島へ

石油をめぐる各国の戦略は七〇年代の〝ホット〟な戦争にもなぞらえられるだろう。アメリカのペトロックス社もそうした競争に打ち勝つための遠大な計画を進めていた。

インドネシアのスラバヤ港を夜明けを待たずに出発したペトロックス社の〝エクスプローラー号〟は、同社の重役ウイルソンの率いる石油調査団が乗りこんでいた。こんどの調査にウイルソンは自分の野望を賭けていた。極秘でデータを集めた有力な油田――海図にもなく、所在すら明らかでないその油田は南太平洋のかなたに確かにあるのだ！

外海に出てまもなく、激しい嵐が襲ってきたが、発信地を確かめる前にとぎれた。どこかで船が難破したらしい。

おだやかな航海が戻ったある日、ウイルソンは船長ロス大佐に命じて乗組員一同を召集すると、エクスプローラー号の本来の目的を発表した。

絶えず濃い霧に覆われ、その実状もさだかでないスカル島――その形状からスカル（どくろ）と呼ばれる不気味な南海の孤島にウイルソンは大規模の海底油田の証拠を発見したのである。過剰な窒素、有毒ではないが異常に濃い炭酸ガスの存在は石油の鉱床から湧き出たものに違いなく、地下に巨大な石油タンクが眠っているのだ――自信たっぷりのウイルソンの説明は突然中断された。

スラバヤから密航したその男はプリンストン大学で霊長類古生物学を研究するプレスコットと名乗った。彼によれば、異常な炭酸ガスは動物の呼吸と考える根拠もあり、古い記録に、すでにスカル島に漂流した先人たちによって、〝地球上で最大の野獣の吼える声を聞いた……〟あるいは〝貴婦人よ、天に届く生きものとそなたの満月の結婚以来、神はそなたを守られるであろう……〟といった謎めいた証言や警告が残っている、という。彼が島に棲息すると想像される幻の生物に異常な関心を持っていることは明らかだったが、ウイルソンは産業スパイではないかと疑ってかかった。

折しも、調査船は美しい漂流物を発見した。波間にたゆたう一隻の救助ボートに一人の若い娘が肌もあらわなイブニング・ドレス姿で倒れているのだ。船員たちは色めきたった。幸い、まだ息がある。医学に心得のあるプレスコットの応急手当てによって娘は意識をとり戻した。

ドワン。それが彼女の名だ。DAWN（あかつき）の綴りを入れかえたのよと冗談ぽく話す彼女は、香港へ映画出演に向かう途中、嵐に遭遇したのだった。エクスプローラー号が受信したSOSはドワンたちのヨットからのものに違いない。

思いがけない美女を加えてエクスプローラー号の航海は陽気になった。ウイルソンはプレスコットへの疑惑を解き、カメラマンとして調査隊に参加させることに決めた。

コング出現！

海一面の霧はスカル島の間近い証拠だ。レーダー・スクリーンに島影がくっきりと映し出される。山地を示す盛り上がった部分で一瞬映像がゆがんだようだが誰一人気づくものはいなかった。

上陸班のランチ・ボートが霧の中をぬって進む。ウイルソン、地質学者のバグレー、プレスコット、船員数名、そしてドワン。彼女は渋るウイルソンを強引に口説き落したのだ。ようやく霧が消え、島が眼前に浮んだ。

威圧的に海岸へ迫る巨大な崖を見上げながら、一行はただちに調査を開始した。険しい岩山や渓谷を越えて進むうち、突然高さ百フィートはあろうかという巨大な塀が現われた。いったい何のために、誰が？　その時、遠くの方から太鼓の音が響いてきた。小高い岩山に登った一行の眼下でいま、数十名の原住民が大鼓を打ち鳴らし、祭りの興奮をもりあげているところだ。行列を組んだ女達が歌いながらみこしを担いで近づく。台上には鳥の羽毛で飾り、花冠をかむった少女が膝まづいている。反対側から猿の面をつけた祭司を先頭に男たちの行列がやってくる。無線交信にSOSが入ってきたが、発信地を確かめる前にとぎれた。どこかで船が難破したらしい。

おだやかな航海が戻ったある日、ウイルソンは船長ロス大佐に命じて乗組員一同を召集すると、エクスプローラー号の本来の目的を発表した。

絶えず濃い霧に覆われ、その実状もさだかでないスカル島――その形状からスカル（どくろ）と呼ばれる不気味な南海の孤島にウイルソンは大規模の海底油田の証拠を発見したのである。過剰な窒素、有毒ではないが異常に濃い炭酸ガスの存在は石油の鉱床から湧き出たものに違いなく、地下に巨大な石油タンクが眠っているのだ――自信たっぷりのウイルソンの説明は突然中断された。

スラバヤから密航したその男はプリンストン大学で霊長類古生物学を研究するプレスコットと名乗った。彼によれば、異常な炭酸ガスは動物の呼吸と考える根拠もあり、古い記録に、すでにスカル島に漂流した先人たちによって、〝地球上で最大の野獣の吼える声を聞いた……〟あるいは〝貴婦人よ、天に届く生きものとそなたの満月の結婚以来、神はそなたを守られるであろう……〟といった謎めいた証言や警告が残っている、という。彼が島に棲息すると想像される幻の生物に異常な関心を持っていることは明らかだったが、ウイルソンは産業スパイではないかと疑ってかかった。

折しも、調査船は美しい漂流物を発見した。波間にたゆたう一隻の救助ボートに一人の若い娘が肌もあらわなイブニング・ドレス姿で倒れているのだ。船員たちは色めきたった。幸い、まだ息がある。医学に心得のあるプレスコットの応急手当てによって娘は意識をとり戻した。

ドワン。それが彼女の名だ。DAWN（あかつき）の綴りを入れかえたのよと冗談ぽく話す彼女は、香港へ映画出演に向かう途中、嵐に遭遇したのだった。エクスプローラー号が受信したSOSはドワンたちのヨットからのものに違いない。

思いがけない美女を加えてエクスプローラー号の航海は陽気になった。ウイルソンはプレスコットへの疑惑を解き、カメラマンとして調査隊に参加させることに決めた。

コング出現！

海一面の霧はスカル島の間近い証拠だ。レーダー・スクリーンに島影がくっきりと映し出される。山地を示す盛り上がった部分で一瞬映像がゆがんだようだが誰一人気づくものはいなかった。

上陸班のランチ・ボートが霧の中をぬって進む。ウイルソン、地質学者のバグレー、プレスコット、船員数名、そしてドワン。彼女は渋るウイルソンを強引に口説き落したのだ。ようやく霧が消え、島が眼前に浮んだ。

威圧的に海岸へ迫る巨大な崖を見上げながら、一行はただちに調査を開始した。険しい岩山や渓谷を越えて進むうち、突然高さ百フィートはあろうかという巨大な塀が現われた。いったい何のために、誰が？　その時、遠くの方から太鼓の音が響いてきた。小高い岩山に登った一行の眼下でいま、数十名の原住民が大鼓を打ち鳴らし、祭りの興奮をもりあげているところだ。行列を組んだ女達が歌いながらみこしを担いで近づく。台上には鳥の羽毛で飾り、花冠をかむった少女が膝まづいている。反対側から猿の面をつけた祭司を先頭に男たちの行列がやってくる。やがて一同はこれも巨大な門の前に集まり、祭りはさらに高潮してゆく。見守るウイルソンたちの耳に、歌声のなかで〝コング、コング……〟とくり返されるのがはっきりと聞きとれた。物珍しい未開の地の結婚式に見とれるうち、ドワンが運悪く見つかってしまった。一行は原住民に取り囲まれ、ドワンを原住民の娘と交換するように迫られた。やむなく銃で威嚇し、いったん船に引きあげた。

その夜はみごとな満月だった。島影を映すレーダー・スクリーンに再び異様な影が盛り上がって動き始めた頃、島から二隻のカヌーが月明りの海を沖合に向けて進んでいた。

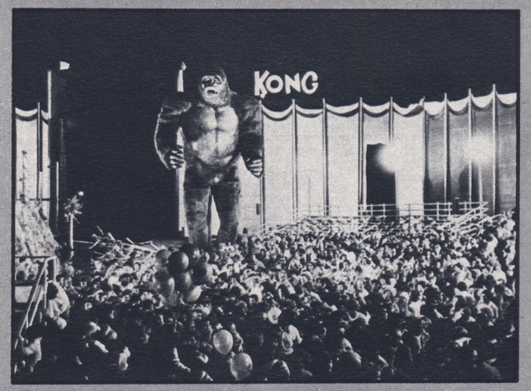
あくまで島の地質調査を主張するウイルソンと対立したプレスコットはその夜単身島に渡り、自分の仮説を確かめようと決意した。準備を終えて甲板に出た彼は、さっきまで夜釣りをしていたドワンの姿が見えないのに気づいた。彼女のいたあたりに羽根の腕環が落ちているではないか！

その頃、ドワンは昼間の少女の代りに〝花嫁〟となって原住民の祝福と祈りを浴びていた。やがて門が開かれ、彼女をのせた台が中へ吸いこまれた。彼女が高い石造の祭壇上に運ばれ、一人だけになると、再び門が閉ざされた。男たちが手に手にたいまつをかざして塀の上に立ち並び、狂ったように叫び始めた〝コング！コング！コング！〟……。

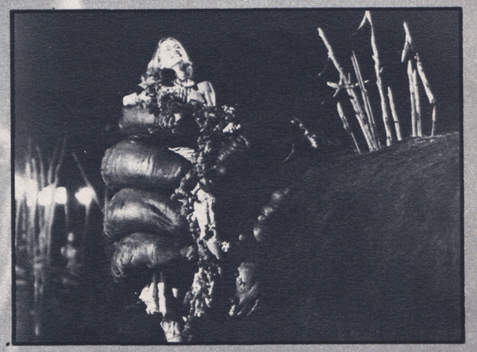
プレスコットたちは、が島に到着したとき聞えてきたこの叫びに呆然とした。万事休す！

角笛の響きと〝コング〟の叫びが最高潮に達した。暗い森の奥から樹木よりも高い物体が近づく。ジャングルをかき分けて姿を現わしたその物体は――何と身









長五〇フィート以上はある巨大なゴリラ、コングだった。薬物によって意識朦朧としていたドワンは頭上にそびえ立つモンスターをはっきりと見た。コングは気絶したドワンをつかみあげると再び森の奥へ去っていった。

コングの花嫁

プレスコットたちはひと足遅かった。巨大な足跡、倒れた樹木は確かに巨大生物の生存を物語っていた。ウイルソンが海岸近くにキャンプを置き、プレスコットが度胸のある船員数名とともにジャングルの奥に向かった。

朝の光を感じてめざめたドワンは昨夜の悪夢が現実のものとわかって恐怖のあまり我を忘れた。逃げることもできない。何しろ相手が大きすぎるのだ。だが、ドワンを見るコングの目から凶暴さは消え、彼女に触れるコングの指先は恋人のようにやさしくこまやかだった。コングの休息を破るものがもしいるとしたら、それはプレスコットたちだろう。

彼らの接近をコングは本能でかぎつけた。捜索隊が渓谷にかかった丸太橋を渡り始めたとき、コングに襲われ、渡り終えていたプレスコットと辛うじて崖っぷちに避難した船員ボーンを除き、全員渓谷に落下していった。

一方ウイルソンはバグレーから、島の石油がまだ熟成していないことを聞かされ、一時は落胆したが、コングを利用することを思いついた。これに勝る強力な宣伝はない。ウイルソンは早速ペトロックスのスラバヤ支社に連絡し、コング生け捕り作戦を開始した。

月光の中にそびえたつ巨大な岩山をコングが登ってゆく。頂上には棲みかがあるのだ。さながらマンハッタンの摩天楼を思わせるその奇怪な威容。プレスコットも先を急いだ。

コングは小さな花嫁を迎えて満足そうだったが、ドワンを狙う大蛇の襲撃でたちまちそこは巨大怪獣の争う修羅場と化したのであった。プレスコットがドワンを救って逃げるのを見たコングは万身の力をふりしぼって大蛇を引き裂くと二人を追った。断崖に追いつめられた二人が谷川へ決死のダイビングを試みたあと、コングが怒り狂って吼えつづける。

門の前に巨大な穴を掘り、多量のクロロホルムの入ったボンベを設置したウイルソンのもとへコングの接近が伝えられた。五分…三分…一分…その時、プレスコットの声が聞えた。ドワンも一緒だ。急いで二人を通して門に閂をさしこんだと思う間もなく、コングが門に激しく体当りを始めた。天地が震え、破片がとび散る。コングがついに門を破って躍り出たのとウイルソンが起爆装置のスイッチを押したのとほぼ同時だった。穴の中にころげ落ちたコングの抵抗がしだいに弱まり、唸り声が小さくなってゆく。

巨獣、ついに死す！

ニューヨークに向かうマンモス・タンカーの貯蔵タンクには石油の代りにコングが収容されている。凱旋将軍のようなウイルソンに対してプレスコットは懐疑的だ——「コングは人びとの命の神秘と恐怖だった。我々はそれを奪っただけでなく、彼らの神をさらったのだ」。その偉大な魔神コングは姿を隠したドワンを忘れてはいなかった。たった一枚の彼女のスカーフの匂いで彼女を思い出し荒れ狂った。ドワンがなだめると安心してお

となしくなるのだった。

ニューヨーク随一の規模を誇るシア・スタジアムは今宵ペトロックス社主催の特別ショーにつめかけた数万の観客で湧き返っていた。真昼のように明るいライトに照らされた会場ではロック・バンドがわめき、花火が夜空にKONGの文字を浮かべる。飾り立てたヘリコプターから降り立ったドワンとウイルソンがスタンドの一方に設けた高台に向かう。そこには八〇フィートはある巨大な給油塔が立っていた。合図とともに覆いがとり除かれ下からコングの巨大な姿が現われた。

〝キングコング〟……場内に恐怖と驚嘆のどよめきが広がる。鉄パイプの檻の中で鎖につながれたコングの叫びはさすがに恐ろしい。やがてスカル島を真似た華やかなセレモニーが始まった。ドワンが壇上に立つと、多勢のカメラマンが一度に押しよせ、ドワンがよろめいた。その光景に会場にいたプレスコットは危惧を感じた。彼はウイルソンの流儀について行けず、訣別したのだった。

運搬の途中、ショックで鎖に亀裂が入っていたが、興奮が高まるにつれ、コングの怒りはさらに増大し、ついに鎖をひきちぎり、鉄の檻を破り始めた。会場はたちまちパニック状態に陥った。逃げまどう人びとをかきわけてプレスコットはドワンを助け出すと場外へ走った。ウイルソンは社長の激怒を浴びて思わずその場にうずくまるのだった。

コングは探していた。ドワン——そのドワンはプレスコットに伴われて駐車場から地下鉄の高架鉄道へと急いだ。背後で叫びと悲鳴、そしてヒステリックなパトロール・カーのサイレンが聞えてくる。二人が乗った地下鉄は前方にコングを見つけて急停車した。いち早くプレスコットとドワンは外へとび出した。ドワンを探すコングは怒って車輛を叩き落したが、ガソリン・スタンドに落下して爆発した。

通りという通りは封鎖され立入り禁止となった。警察が、軍が出動し、非常警戒がしかれ、プレスコットたちの動きを阻止した。一方、コングの前進を空と陸からの攻撃が阻んでいた。

その夜は満月だった。逃げる途中、プレスコットは月を眺め、突然島での記憶がよみがえった。いまコングはマンハッタンに向かっている。そのスカイラインはあの巨大な岩山を想起させるではないか！彼はすぐに市会に連絡し、コングを殺さないという条件で特別の秘策を伝えたのだった。

市内の破壊をつづけるコングは、プレスコットのいないスキにドワンを見つけ出すと、まっすぐマンハッタンに進み、ニューヨーク最高のツインタワー・ビル、世界貿易センター・ビルを登り始めた。プレスコットの推測は正しかったのだ。新たに空軍が出動した。

屋上に立ちはだかるコングを地上のサーチライトがくっきりと浮かび上がらせた。火炎放射器の猛攻を逃れ、コングはもう一方のビルの屋上に飛び移った。こんどはジェット・ヘリの編隊が攻撃を開始した。ドワンは叫んだ、「私を放しちやだめ！殺されてしまうわよ！」だが、激しい銃弾を浴びながらもコングは彼女をわきへ押しやるのだった。一段と激しくなる攻撃に力を失なってゆくコング。プレスコットは軍に欺かれたと知って怒ったもののどうすることもできない。やがて、コングは力尽きてよろめくと四一一メートルの上空から落下していった。キングコングの死——ドワンはいつまでも泣きむせんでいた。



世紀の巨編「キングコング」はこうして完成した！

関　建二郎

世界を興奮のうずに巻き込んで撮影開始！

キングコングが生きている！

「スクリーン」（十一月号）の特集記事ですでに報告されているとおり、シア・スタジアムから始まるニューヨークの大パニック・シーンの撮影で本年八月、ロスアンジェルスのMGM撮影所に初めてその全貌を現わしたキングコングを目のあたりにしたとき、世界中から集まったジャーナリストや映画人は実感として受けとめたのである。

黄金期のハリウッドにして創造しえた不朽の傑作キングコングがニューヨークの地上三八一メートルのエンパイア・ステート・ビルの屋上から壮烈な最期を遂げて四三年、七六年のいま、新たな生命を得て、再び、キングコングがその巨大な偉容をみせたのだ。

生命を与えたのは国際的大プロデューサー、ディーノ・デ・ラウレンティス。かつては「戦争と平和」「天地創造」などのスペクタクル巨編をはじめ、本拠をイタリアからアメリカに移してからも「シンジケート」「マンディンゴ」「コンドル」「セルピコ」と、矢つぎばやに話題作を手がけ、疲れを知らない精力的な活躍ぶりであるが、その超一流の判断力と手腕が、スペクタクル映画の古典といわれ、SF、巨大怪獣、ロマンと、あらゆる映画の魅力をもりこんだ「キングコング」を選んだのはさすがである。

製作費七十五億円、キングコング本体だけでも何と九億円もかかったという世紀の巨編はイタリアとハリウッドの技術の粋を結集してようやく完成をみることになった。まさしく、それは頭脳と技術の偉大な成果である。

しかし、それに伴なうさまざまな問題や障害も当然比例して多かったのである。四三年前とはいえ、「キングコング」には原著作権者が存在し、しかも今回の製作に当って、ディーノ・デ・ラウレンティスのほかにもう一人、強力なライバルが名乗り出たことが余計問題を複雑にした。この間のいきさつは「スクリーン」七月号で詳細に説明されているので省略するが、正式契約を権利保有者RKO側と取りかわしていたデ・ラウレンティスが最終的に名実ともに製作開始したのであった。これに先立つ七五年夏、デ・ラウレンティスは映画史上画期的な大作を製作するに当り、現在望みうる最高最強のスタッフをはやばやと集めていた。

まず、監督には「タワーリング・インフェルノ」のジョン・ギラーミンが指名された。超高層ビル火災の恐怖を華麗な演出でクローズ・アップした名人芸をこんどは巨大ゴリラを相手に存分に駆使してたっぷり見せ場をつくっている。脚本はロレンゾ・センプル・ジュニア。「パピヨン」「コンドル」など、重厚な構築と綿密な描写で大作を書きこんでゆく筆力は抜群である。骨格は旧作どおりながら、時代も人間も大きく変った七〇年代の空気を全面的にシナリオにとり入れ、オリジナルといっていいほどの独自のストーリーとなっていることに注目したい。撮影に「キャメロット」のリチャード・クライン、音楽は「007」シリーズでおなじみ、「野生のエルザ」「冬のライオン」で二度のアカデミー賞のジョン・バリー、美術は「ミクロの決死圏」でアカデミー賞を得たデール・ヘネシーとイタリア映画界随一のマリオ・チアリが共同で当っている。これだけでも壮観というほかはない顔ぶれである。

だが、製作スタッフが最も力を注いだのは並ぶものなきヒーロー、キングコングであった。単なるミニチュアでは迫力に欠ける上、特撮にも限度があり、また人間のぬいぐるみによる演技でも逆に不自然さによるアンバランスが気になってこよう。

特殊効果担当のベテラン、グレン・ロビンソン（「大地震」）とカルロ・ランバルディの努力はこうした難点をいかに最少限に食い止めるかで、他のどのスタッフにも増して根気が必要であった。誕生日は明確でないが少くとも本年一月、場所はハリウッドのMGM撮影所。生まれたばかりのキングコングは赤裸らぬアルミニュームとワイヤーの全身をさらしていた。しかし、この嬰児は生まれながらにしてすでに身長二〇メートルの巨体を有していたことが大きな特徴だ。この巨大なキングコングをしかもそれを生きているキングコングさながらに自由自在に動かし、カメラにとらえていく――実にロビンソンとランバルディはこの途方もない目的に知恵と工夫をしぼりぬいたのである。

キングコングの内臓には二一〇〇フィート（約千メートル）に及ぶ水圧ホース、四五〇〇フィート（約千六百メートル）に達する電線が複雑に組みこまれ、コンピューター操作によって動く目、鼻、口、耳、手、腕、脚など、いずれもスムーズな動作をコングにあたえたのである。〝メカニカル・コング〟と呼ばれる、コンピューター時代にふさわしい、キングコングの誕生である。ちなみに、初めは航空機製造会社に依頼する予定であったが撮影が予定よりも早まったため、ハリウッドで自主製作することになったもの。その成果はスクリーンで披露されるわけだが、十六とおりもの異なった動きをみせる手の微妙繊細なしぐさは、ヒロインのドワン（ジェシカ・ラング）との〝ラブ・シーン〟でじっくりと堪能できるだろう。

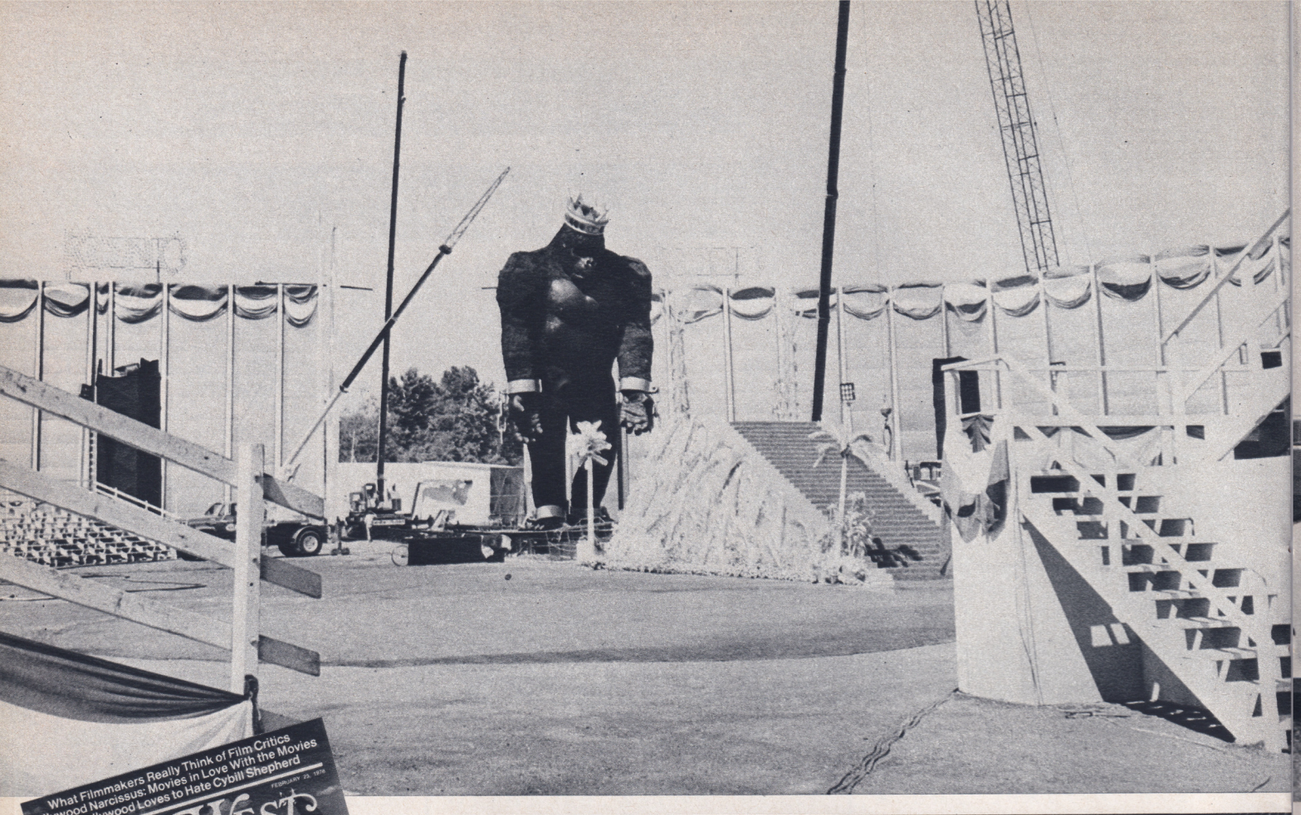
ちなみに、この映画ほど絵コンテが詳細に描かれたことも珍しい。おかげでスタッフは現在どのシークェンスを撮影中なのか容易に把握できたのである。

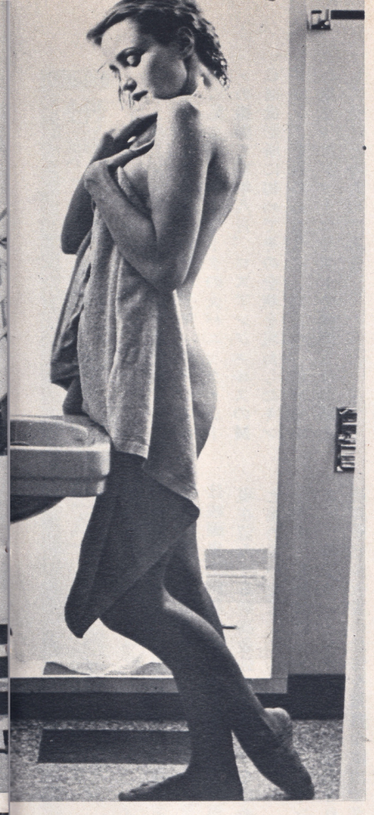
ロビンソン＝ランバルディの仕事はこれで終わらない。コングの全身を覆う剛毛を植えつけなければならない。担当のマイケルディーノは動物園のゴリラを詳しく観察し、その動き、表情などから有益なヒントを得た。彼の意見によってアルゼルチンから四千ポンド（約千八百キログラム）もの馬の尾の毛が輸入され、漂白を施し、新たに染め直したのである。これらの大量の毛は何百というパネルにとりつけられ、こんどはコングの骨格を覆うプラスチックの鋳型にくっつけられたのである。ここに至るまでに数ヵ月費したことはいうまでもない。

一方、撮影の進行は能率的なスケジュールに従い、本年六月にはニューヨーク一の高さを誇るツイン・タワー・ビル、世界貿易センター前の広場でハリウッドにいるコングとは別のもう一体のコングが〝出演〟していた。ここでは、ビルの屋上で空軍の攻撃により重傷を負ったコングが墜落し、壮絶な最期を迎えるシーンの撮影が行なわれた。大きさはまったく同じであるが、すでに横たわった遺骸であるため、別あつらえのコングがラスト・シーンを飾ることになったのである。たまたま夜間撮影であったが、これに先立って、新聞広告でこのことを呼びかけたところ、三万人の群衆がバス、自家用車、地下鉄と、交通手段もさまざまにロケ現場にかけつけ、コングのまわりを埋めつくした。スタッフとしてはせいぜい五千人ていどの群衆をカメラに収めることで、この偉大なヒーローのラストをしめくくるつもりであったが、あまりの反響の凄さに、ニューヨークッ子の物見高さ、そして何よりもキングコングに対する一般の関心の強さを改めて認識させられたのである。なかでも熱心なみやげ物漁りは撮影中のどさくさにまぎれてコングの身体から毛を持ち去っていったほどで、スタッフもこればかりは苦笑せざるを得なかった。

ニューヨークといえば、クライマックス・シーンの舞台がエンパイア・ステート・ビルから世界貿易センター・ビルに変ったことに抗議して、旧作の熱心なファンのグループがゴリラの扮装で反対デモを行なう一幕もあるなど、いやがうえにも興奮は募る一方であった。













さまざまの難関を越えてついに完成！

キングコングの活躍をひきたたせるのはその相手役たる人間たちだが、むしろこの映画の場合は共演者といった方が妥当かもしれない。しかし、その撮影は、さまざまな厳しい条件が待ちかまえていたのである。

その第一は海上撮影であった。スタジオの中と違い、屋外での撮影は天候に左右され、スケジュールは絶えず変更を余儀なくされやすい。まして海上となれば、そのほかに乗船スタッフ人員の制限や機材の運搬など、新たな苦労も加わってくる。

さて、海上のシーンは南カリフォルニア沖合の海で撮影が行なわれた。コング発見の遠因をつくるベトロックス社の油田調査船エクスプローラー号が南太平洋を航海するという設定である。大学の調査船を借りて、そこに撮影機具をはじめ、大小さまざまの科学機器がつめこまれたが、なかでも出色なのは六器の霧発生装置であろう。なにしろ、エクスプローラー号はドラマでは霧に包まれた謎の孤島に向かうわけだから、どうしても霧はかかっていなければならない。しかし、このときの撮影は一月、しかもカリフォルニア近海はこの季節には一年でも最も乾燥しており、天候は快晴で太陽はさんさんと光り輝くという皮肉な現実。だが撮影に霧は欠かせず、霧発生装置がその難関を突破してくれることになった。なお、この文明の利器は、このあと、ハワイ・ロケにおいても絶大な偉力を発揮してスタッフを喜ばせることになった。それだけに値段も張り、一器七五〇〇ドル（約二二五万円）。ただし、この装置も風が出ては効力がなく、スタッフも天気予報の中でも風力には特に関心を強め、風のない、おだやかな日和を選ぶのに苦労したという。

いよいよ、コングの棲むスカル島（スカルとは英語で頭蓋骨＝どくろを意味し、その島の形状が遠くから見るとどくろのようなので名づけられた）だが、ドラマの設定にぴったり合うような場所がそうざらにあるものでない。南太平洋海域を探索したあげく、ハワイ諸島の西北端にあるカウアイ島の北海岸の様相がまさにうってつけなことがわかり、ここをスカル島の上陸地点と定めたのである。かつて映画のロケに使われたことがなく、人間に踏み荒らされた跡も見えず、幻の孤島の不気味なムードが漂っているのが何よりもスタッフの気に入った。その半面、奥地に入りこむには道らしいものもないので、連日四、機のヘリコプターが五〇人のスタッフを運搬しなければならなかった。食料も機械の補給もすべてベース・キャンプからロケ現場に空輸され、撮影が続けられたのである。

現地では自然環境保護団体などが汚されるという懸念を表明したこともあったが、スタッフの整理のみごとさがそうした不安を一掃したこともさわやかなエピソードである。ところで、先に海上撮影で威力を発揮した霧発生装置はここでもめざましい働きを見せた。三週間に及ぶロケが最後の週の撮影に入ったときのことである。エクスプローラー号の探検隊が霧の中をぬってスカル島を進むシーンで大量の霧が発生させたのだが、ロケ地に選ばれたハネレイ・ビーチの人びとは時ならぬ霧にびっくりさせられたという。晴天の霹靂ならぬ濃霧というところか。なお、このハネレイ・ビーチはかつて「南太平洋」のロケが行なわれたところで、映画ロケには慣れていたというが、まさか霧にまかれるとは予想もしていなかったに違いない。

すべての点で大がかりなこの映画の見もの の一つは巨大な塀であろう。塀というよりは万里の長城にも似た城壁とでもいった方が適当かもしれない。スカル島の住民が恐れ崇めるキングコングの聖域と彼らの居住区域を隔てる境界は、高さ二五メートル、長さ百五十メートルの規模で築かれた。このため、〝百万弗の人魚〟エスター・ウイリアムズが身をひるがえしたプール跡や「愛情の花咲く樹」の農園などが取り払われてしまうことになった。五五〇〇ポンド（約二五〇〇キロ）の釘、八二〇〇本のユーカリ樹の柱、十一万五四〇〇メートルに及ぶブドウのつる、何トンものコンクリートとセメントをはじめ、ビニール・ペイントやプラスティックなども多量に投入、総額八十万ドル（約二千四百万円）をかけて完成をみた。当初は石造の壁の予定であったが、ギラーミン監督がニューギニアの原住民の作った「戦いの園」の様式をとり入れ、「ミクロの決死圏」のデール・ヘネシーが監督の意向を生かした城壁を築造したのである。満月の夜、コングと花嫁との〝結婚式〟を待ち受ける島民の大合唱〝コング、コング、コング…〟のシーンをはじめ、花嫁のドワンを奪われて怒り狂うコングの城門を破るシーンが撮影されたが、何百人というエキストラが城壁の上に立って足を踏みならしてもびくともしなかった。偶然このシーンの撮影現場にひょっこり顔を見せたイングマール・ベルイマン監督は壮大なスケールにしばしみとれ、かつてハリウッドの輝ける栄光の時代を彷彿とさせると感嘆しきりだった。

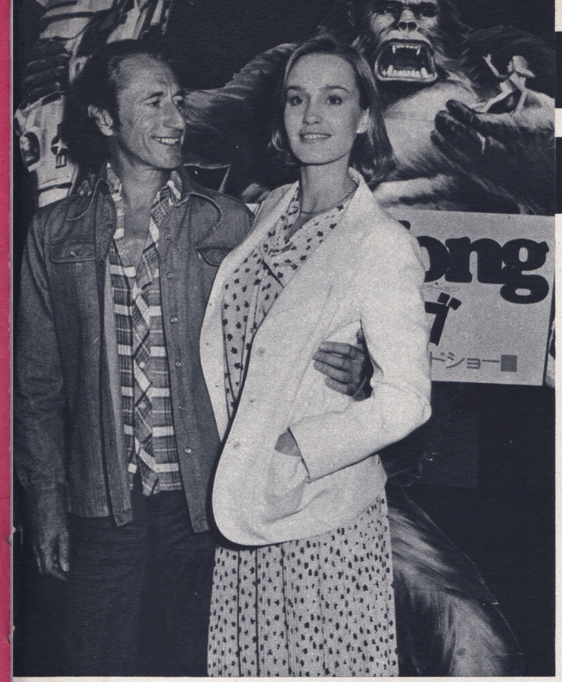
探検隊の策略にあって捕えられたコングがニューヨークへ輸送されるスーパー・タンカーはノルウェーのタンカー、スザンヌ・オンスタッド号で、中東からアメリカ西海岸まで航行しており、撮影はこのタンカーで一週間行なわれた。

クライマックスは実際にニューヨークの各所において撮影班がそれぞれ陣取り、恐るべきパニック・シーンの光景を収めた。クイーンズバラ・ブリッジ、地下鉄の高架鉄道、マンハッタンのハノーバー広場、五番街、セントラル・パーク、聖パトリック大寺院などがマンハッタンの南端にそびえる世界貿易センター・ビルに向かうコングの怒りにみちた破壊の嵐にまきこまれてゆくのである。かくして、ニューヨークはひさびさに世界の注目を集めることになったのであり、その原因となったコングは一躍ニューヨーク中の新聞の紙面を飾り、さらに全世界にその阿修羅ぶりが伝えられたのであった。

「キングコング」は〝美女と野獣〟のロマンだ、と製作者ディーノ・デ・ラウレンティスは語る。四三年前の「キングコング」との相違は、この点を昇華させることに専念したことであろう。キングコングは恐怖には違いないが、一面、純粋で高貴な精神の持主である。何者にも支配されず、自然の中に生き、自然とともに息づく。外敵に侵略されない限り、相手を害せず、自分の所有するものに対しては最大の努力を払ってこれを守護する。ドワンが自分の花嫁と定められながら、邪魔者によってさらわれたときのコングの怒りはだから当然なのだ。愛する者のためにコングは闘い、そして傷つき、裏切られ、悲壮きわまりない最期を遂げる。最後のシーンの撮影でドワン役のジェシカ・ラングが流した涙はまさしく本物の涙だった。

宣伝キャンペーンのため来日したギラーミン監督は自信をもって言いきった――これは新しいオリジナルのキングコングである。その自信がキングコングを〝生きている〟ものにしたのだ。





監督 ジョン・ギラーミン

主演女優 ジェシカ・ラングに「キングコング」の裏話を聞く

インタビューアー 筈見有弘





「キングコング」宣伝キャンペーンのため、11月15日、ジョン・ギラーミン監督と主演女優のジェシカ・ラングが来日した。16日、帝国ホテルで記者会見。その夕方、ジェシカ・ラングに、翌朝にはギラーミン監督に単独インタビュー。この時点では、まだ試写を見られなかったので、話がややもどかしい。

まずギラーミン監督。午前11時だというのにウィスキーを飲みながらの応対。ギラーミン監督というと、どうしたって「タワーリング・インフェルノ」と結びつく。

――パニック映画の巨匠として、もし東京を舞台に恐怖映画をつくるとしたら、どんな題材をえらびます？

「ぼくのつくったパニック映画は1本だけ。ぼくはパニック映画が好きではないし、『キングコング』はロマンティックな映画です。それにパニック映画の時代はもう終りです。いまはオカルト、そしてSF映画です。ぼくの次回作も『砂丘』というSFです」

――むかしの「キング・コング」をどう評価しますか？

「9歳のとき見て、すごくコワかった。だけど粗っぽい映画だと思ったね。ぼくは本質的に恐怖映画、モンスター映画は好きじゃないのです」

――それじゃ、こんどのはモンスター映画ではないというわけですか？

「全然ちがいます。ロマンティックなんです。ヒロインがコングの愛にこたえ、反応をしめす。それにコングの方も、表情によって微妙な感情を表現します。むかしのコングは、表情などつくれないから、ヒロインとのリレーション・シップをだせなかった。漫画みたいなものでしたね」

――むかしの「キング・コング」は、「怪獣は飛行機で殺されたのではなく、美女に殺されたのだ」という有名なセリフで終っているわけですが、こんどはありませんね。

「コングは美女のために死んだのではなく、現代社会に適応できずに死んだのです。新作の最後は、コングを死から守るために、ヒロインが〝私を抱いて……〟と叫ぶセリフです」

――恐竜や怪鳥もでてこないようですが…

「大蛇がでてきて、コングと闘うところはあります。他の動物がでてこないと、島にコング以外なにも棲んでないみたいなので登場させたのです。恐竜のように意味のないものはやめにしました」

――特撮がすばらしいと評判ですが……

「12の違ったテクニックを使っています。一場面の中にもいろんな技術が合成されているんですよ。特撮はきっとアカデミー賞をとりますね」

――ジェシカ・ラングはどんな女優さんですか。

「やる気にさえなれば、すごく可能性のある人です。リブ・ウルマン、エバ・マリー・セイント、フェイ・ダナウェイをミックスさせたような個性の持ち主です」

そのジェシカ・ラングのいちばん尊敬する女優も「リブ・ウルマンです。ああいう女優になりたい」。ブロンドにスリムな肢体、白いブラウスで、しじゅう笑いながら、気楽に質問に答えてくれた。

――むかしの「キング・コング」を見ましたか？

「完全に見たのはこんどの撮影が終ってからです。以前、テレビの深夜番組で見たことがあるけど、部分的に見ただけなので、よくおぼえていませんでした」

――二つの作品のいちばん大きな違いはどこでしょう？

「まったく違う作品です。こんどの作品では私の演じるドワンはコングと心をつうじあうわけですから……。むかしの作品で有名なフェイ・レイを意識することもありませんでした」

――抜擢されたきっかけは？

「パリでパントマイムをやり、ニューヨークでダンスの勉強したり、1年ほどモデルをやったりしていたのですが、パラマウントの親会社ガルフ・アンド・ウエスタンの社長が推せんしてくれて、カメラ・テストをうけたわけです」

――どんな気持でしたか？

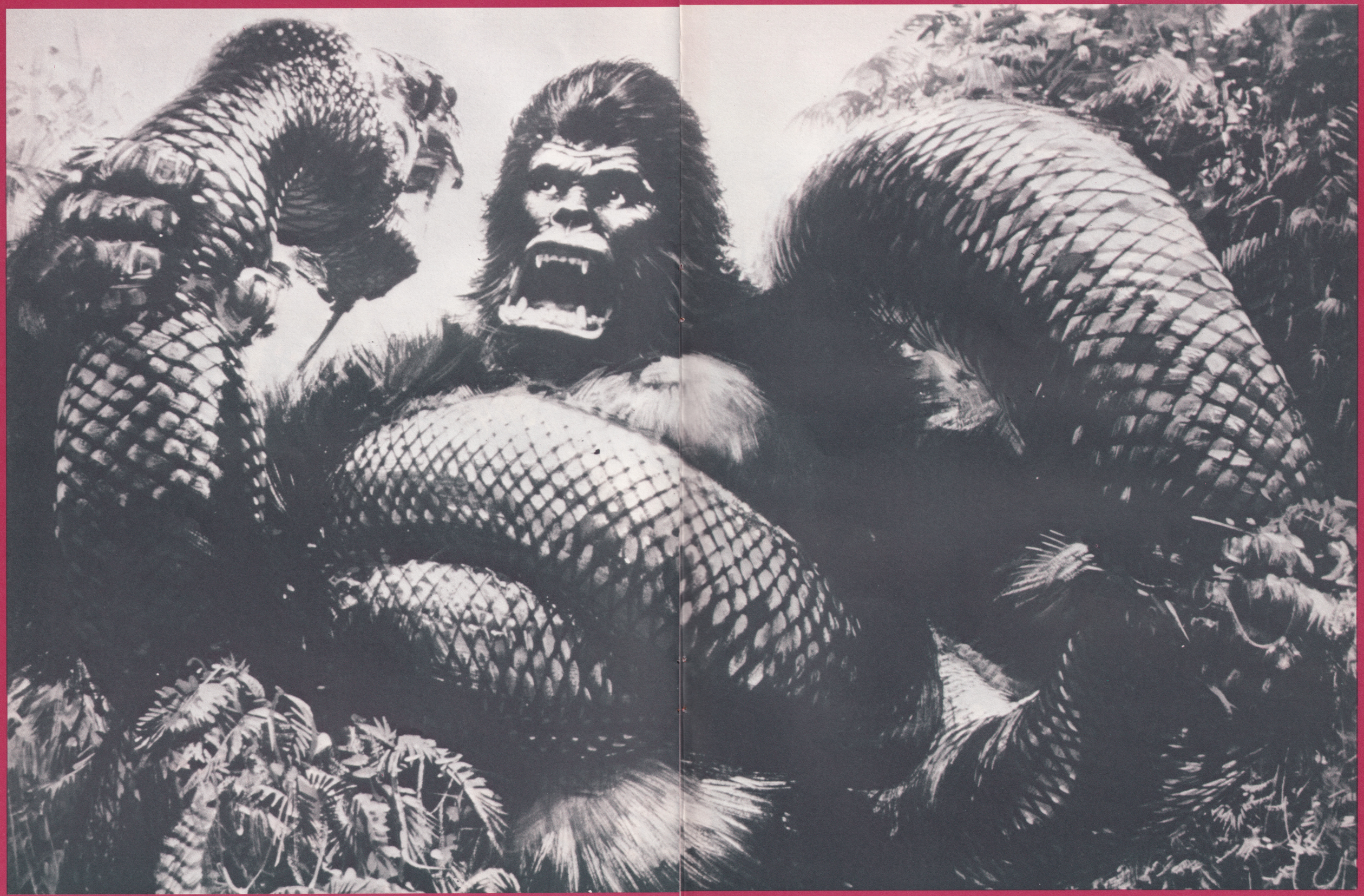
「生まれてはじめて撮影所へ行ったので、それだけでドキドキ。3シーンのテストをやったらギラーミン監督の眼がかがやいていたので、もしかしたら合格かなと思ったわ」

――コングの手に握られて、どんな気持？

「ほんとうはメカニックに出来たてのひらでしょう。しめつけられるこわさはなかったけれど、地上20、30フィートの高さに持ちあげられるので、はじめは落ちるんじゃないかと恐怖感がありました。でも慣れてくると快適でしたよ」

――年齢とご主人のことを……

「28歳です。主人はパコ・グランデというドキュメンタリー映画のカメラマンで、こつこつ好きな映画を撮影しています。住んでいるのはニューヨークのグリニッチ・ビレッジ。世界貿易センター・ビルがとてもよく見えるところですよ」





キングコングのむかしといま

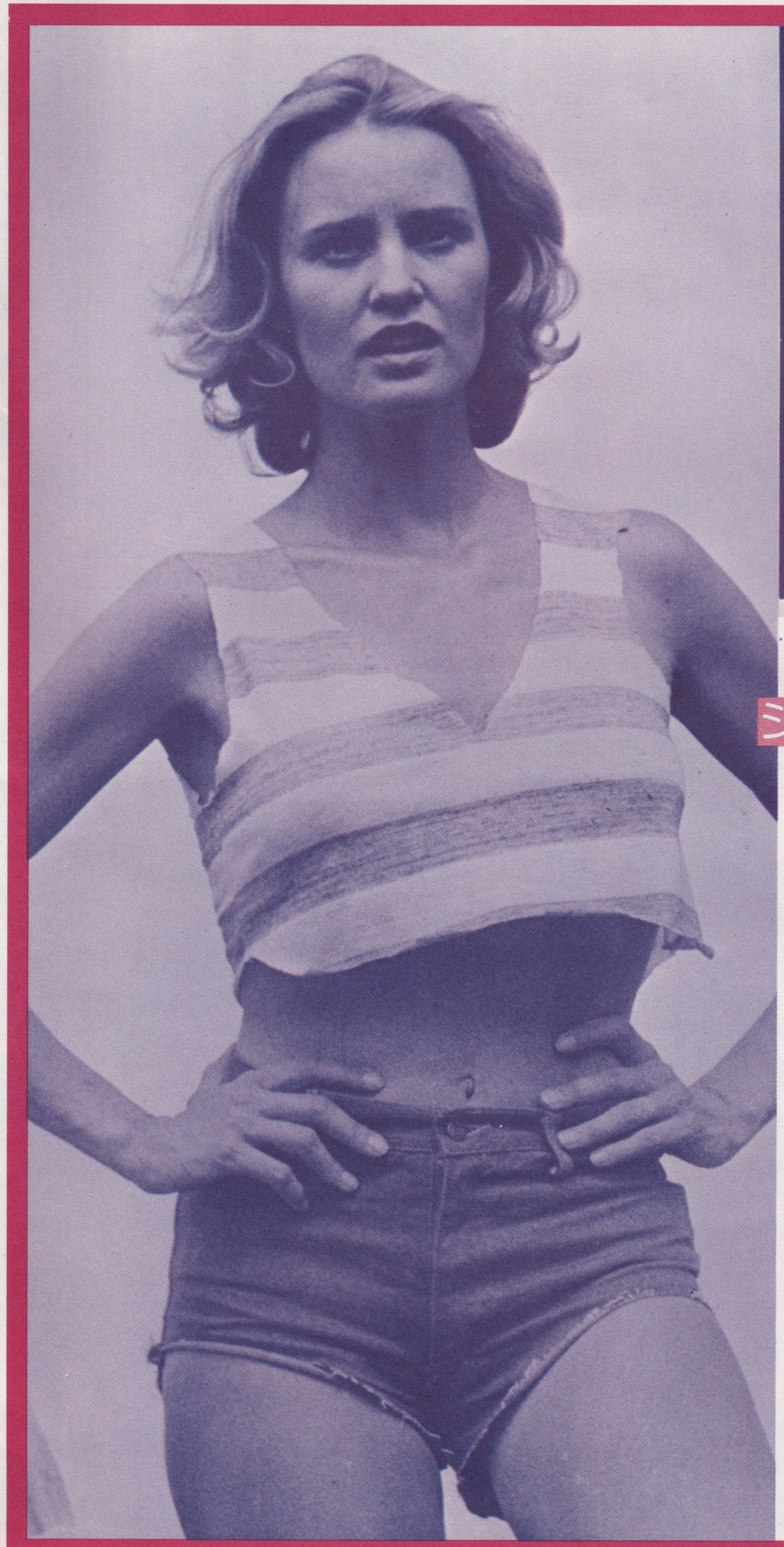
オレ、あたらしいコングー

オレ、むかしのコングー

むかしの
コングさん、
おまえさんもだいぶあばれたせいか、ずいぶんとトシをとったナ。アタマが薄いぜ。ところでオレ、二代目…ハデなところを見せたかったヨ。力にかけちゃあ、おまえさんには負けねエ。まあ、せいぜい稼がせてもらおうら、先輩さんよ、安心してくんな。じゃあアバヨ。



「キングコング」を作った人たち





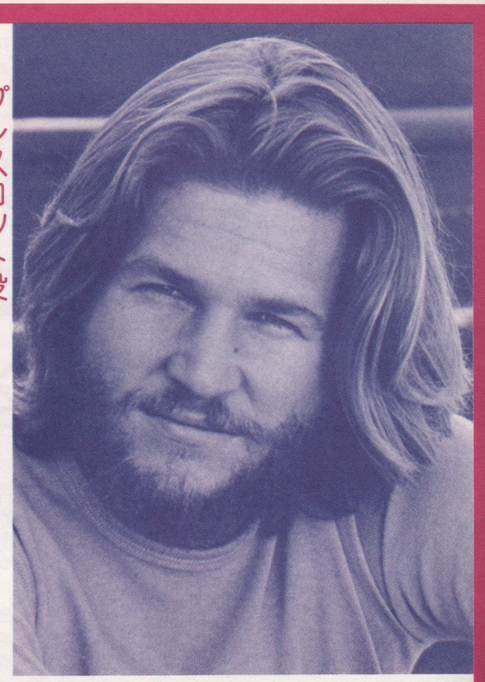
ドワン役
ジェシカ・ラング
JESSICA LANGE

トップ・モデルのマーゴー・ヘミングウェーがプロデューサー、ディーノ・デ・ラウレンティースによって「リップスティック」で映画界入りしたのはよく知られているが、ジェシカ・ラングもまた、ラウレンティースに見出されたモデル出身の女優である。

アメリカはミネソタ州の生まれ。州内各地を転々としたのち、ミネソタ大学に入った。その後パントマイムを勉強するために、パリへ渡る。やがてニューヨークにもどり、今度はダンスのレッスンを受けた。そしてモダン・ダンスのグループに加わったが、その現代的な魅力とセンシティーブな美しさに目をつけられ、やがてモデルの道へ入った。それが女優への座に導くもとになったのはご承知の通り。

彼女がこの映画のヒロインに決まったのはわずか2時間のスクリーン・テストだった。こうして長い間女優になることを夢みていたジェシカは、この一作品でスターの道を歩むことになったわけである。

作家ではスタンダール、音楽家ではシューベルトが好きだという知性派。76年11月15日この映画の宣伝のため来日した。

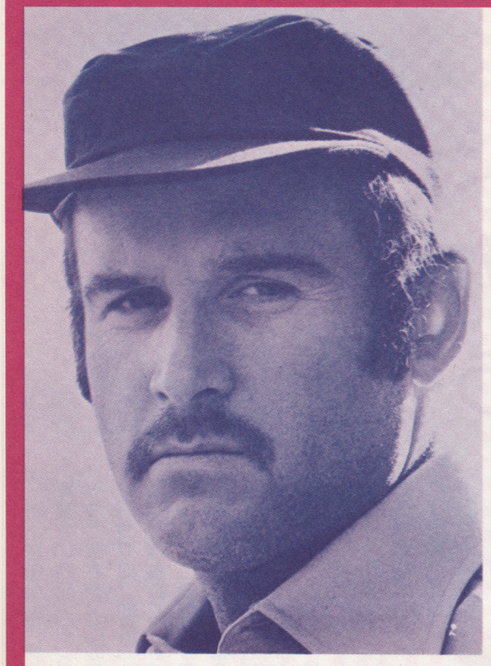


プレスコット役
ジェフ・ブリッジズ
JEFF BRIDGES

一九四九年十二月四日カリフォーニア州の生れで、父は俳優ロイド・ブリッジズ、母は女優ドロシー・シンプスン、兄は「あの空に太陽が」のボー・ブリッジズという俳優一家の次男。

この映画で、コングの発見に力を尽くし、その保護を訴える若き生物学者に扮して名演を見せている。それもそのはずデビューして二作目の「ラスト・ショー」で早くもアカデミー賞にノミネートされ、クリント・イーストウッドと共演の「サンダーボルト」で再びノミネートという現在もっとも有望視されている若手演技派なのだ。

彼の芸歴は長く、子供の頃から父のTVシリーズに出演、ハイスクールを卒業後は口サンジェルスからニューヨークへ移り、ユタ・ヘーゲンの芸能学校で本格的に演技を学んでいる。また作詞・作曲にもすぐれた才能を示している。



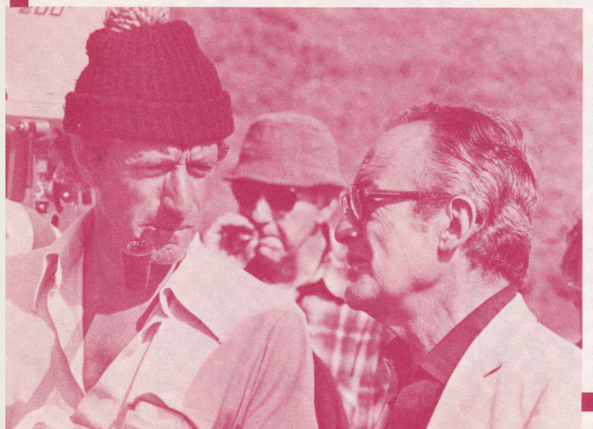
ウィルソン役
チャールズ・グローディン
CHARLES GRODIN

野心満々の石油会社幹部で、その出世のためにキングコングをアメリカに連れて来るが、あえなく踏みつぶされてしまうという憎まれ役に挑んだグローディンは、映画出演こそ少ないが、舞台ではベテラン。

一九三五年四月二一日ペンシルバニア州ピッツバーグに生まれた。マイアミ大学を出たのち、ユタ・ヘーゲンとリー・ストラスバーグについて演技術を学び、やがてブロードウエーの舞台に立ったが、のちに脚本家、演出家を志し、オフ・ブロードウエーの舞台脚本やTVの脚本を書き、自らこれらを演出した。

マイク・ニコルズの要請で映画「キャッチ22」ほかに出演したのち「ふたり自身」の主役に抜擢された。近くはキャンディス・バーゲンと共演した「新・おしゃれ泥棒」の演技が記憶に新しい。

監督 JOHN GUILLERMIN
ジョン・ギラーミン
プロデューサー DINO DE LAURENTIIS
ディーノ・デ・ラウレンティース



ジョン・ギラーミンの名をスペクタクル映画の巨匠として知らしめたのは、やはり「タワーリング・インフェルノ」だろう。高層ビルの火災の恐怖の中に、そこに閉じこめられた人々の人間模様をみごとにとらえていた。その才能が買われてこの超大作のディレクターに当たることになったのだが、期待に答えて娯楽大作に仕上げた。これで押しも押されぬ大物監督として認められることになった。

その彼は1925年11月11日ロンドンに生まれたイギリス人。幼い頃から映画の世界にあこがれ、第2次大戦で空軍に参加したのちフランスに渡り、映画の仕事にたずさわるようになった。最初はドキュメンタリー映画を作っていたが、イギリスにもどってから劇映画監督となり、主にアクション作品を演出。66年「ブルー・マックス」の評判により、段々とハリウッドの大作を手がけるようになり、ついに巨匠の地位をつかんだのである。76年11月15日ジェシカ・ラングと共に来日している。

一方、プロデューサーのディーノ・デ・ラウレンティースは、誰知らぬ人もない大物。イタリア時代、やはり大プロデューサーのカルロ・ポンティと組み、「戦争と平和」「カビリアの夜」などイタリア映画史に残る数々の名作を手がけた。73年に事務所をニューヨークに移し、「コンドル」や「リップスティック」などこれまた話題作を発表している。

ガオー！はキングコングの合い言葉

子門真人　唄
丹羽しげお　作詞
小林　亜星　作曲
高田　　弘　編曲

1）キングコングは王様だ
キングの道はデッカク進め
俺らのプールは太平洋
それでもせまくて　チャープ　チャプ
東京タワーもすべり台
ズボンもすりむけ　スーイ　スイ
デッカイ事はいいことだ
ガオー！　ガオー！　ガオー！
ガオーはキングコングの合い言葉

2）キングコングは王様だ
キングの道はデッカクいこう
俺らのおやつは雲の綿あめ
つかんでちぎって　パーク　パク
お相撲さんたち顔まけさ
しこふめ　塩まけ　ハッケ　ヨイ
デッカイ事はいいことだ
ガオー！　ガオー！　ガオー！
ガオーはキングコングの合い言葉



3）キングコングは王様だ
キングの夢はデッカクみるぜ
俺らのパンツはキングサイズ
おしゃれはたいへん　キュウー　キュウ
富士山まくらに　高鼻息
父さんかおまけ　グー　グッ
デッカイ事はいいことだ
ガオー！　ガオー！　ガオー！
ガオーはキングコングの合い言葉

承認Nippon Television Music Corp.

DISK



レコードで**キングコングを**楽しもう！

史上空前の製作費75億円をかけた今世紀最大の映画「キングコング」がついにやってきたが、この世紀のヒーローのカムバックに、町はコング・ブーム一色にぬりつぶされている。

さて、この世紀の巨編の音楽は、ということになると映画音楽ファンならずとも気にかかるところだが、これは映画音楽界のナンバーイジョン・バリーが引受けている。ジョン・バリーと言えば、一連の〝007〟シリーズや「野生のエルザ」、「冬のライオン」等でおなじみであり、そのメロディー、ラインの美しさには定評がある。

レコード業界のほうでもこのコング・ブームにあやかり、さまざまな「キングコング」を発売するようであるが、その中からいくつか選んでご紹介しよう。

まずはジョン・バリー担当のサウンドトラックだがこれは、シングル盤（タムレコード　ＹＴ－４０１０　六〇〇円）が「キングコングのテーマ」と「メインテーマ　ドゥンのバラード」のカプリングであり、ＬＰ（同　ＹＸＬ－７０３２　二五〇〇円）の方は映画の全編にわたって重要な場面が順に並んで入っている。

その「キングコングのテーマ」はものすごい。イントロにコングの天地をゆるがす叫び声が入っており、それから土人のたたく太鼓のリズムに乗せて「コング、コング〟という大合唱で次第に盛り上がり、様々な楽器で短かいフレーズの交換があった後、コングの叫び声とドラミングで終りになっている。まさに「キングコングのテーマ」であり、大迫力で聞くものを異様な世界へ引きずり込んでしまう。

それと対照的に「メインテーマ」の方は、サブタイトルの「ドゥン（主役の美女）のバラード」の名が示す通り、華麗な音楽である。途中で何回か転調が行なわれているが、自然であり、バリーらしいと言える。

ＬＰの方は「オープニング」から「エンドタイトル」まで全13曲が収録されているので、ファンには聞き逃がせないものであろう。豪華なカラー・ポスターがサービスについているということも魅力のうちだろう。

さて、今度は映画とは直接関係がないが、**「ガオー！はキングコングの合い言葉」**（東宝レコード　ＤＴＩ－４１０３　六〇〇円）というユニークなレコードが発売されている。これは〝たいやきのお兄さん〟として子供の間では人気絶頂の子門真人が唄うもので、作曲はＴＶの人気者だった寺内貫太郎としておなじみの小林亜星であり、たいへん憶えやすく子供の間でまたまた流行しそうである。ジャケットもおもしろく、映画のポスターでは右手にロッキード、左手に美女を持ったコングが、このレコードでは右手に子門真人、左手に小林亜星というあんばいである。



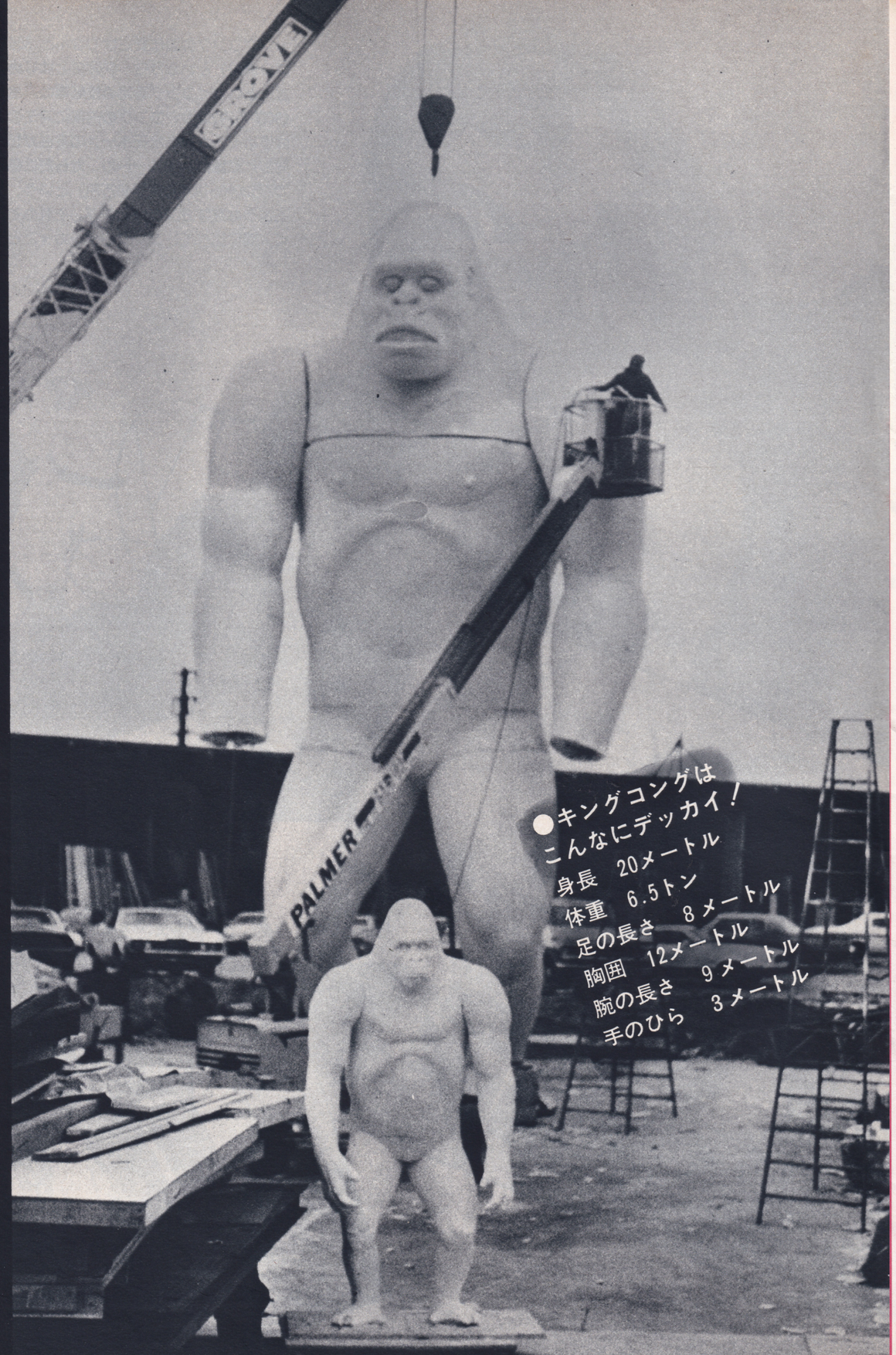
さてもう一枚、**「ソウル・キングコング」**（タムレコード　ＹＴ－４０１１　六〇〇円）というレコードがある。星条旗を連想させるビルディングが立ち並んでいるのをバックに、アフロヘアーのキングコングがエレキギターを持って踊っている、というジャケットからも想像がつくように、ディスコ・サウンドのキングコングである。

この「ソウル・キングコング」は、映画「大神家の一族」の音楽を担当して話題になった大野雄二がアレンジを担当している。演奏も「大野雄二とキングコング・ハンターズ」というグループだが、これは実在のグループではなく、スタジオ・ミュージシャンのピックアップメンバーである。

「ソウル・キングコング」のテーマとなっているのは、サントラの「キングコングのテーマ」と「ドゥンのバラード」のメロディーだが、実によくディスコサウンドのリズムに乗っており、気持ちがよい。これもまた、ディスコ・ハウスではやりそうだ。

「キングコング」のレコードをいくつか紹介してみたわけだが、それぞれ違った味があるので、聞き比べてみるのもおもしろい。

キングコングはこうして作られた！



レコードとポスターを180名様にプレゼント！

PRESENT!









ポスター　★80名様

★80名のみなさま（１点20名様）に上記の「キングコング」イラスト・ポスターを差し上げます。ご希望の方は官製ハガキに住所・氏名・年齢・職業と、**ポスター希望**と書き、ハガキ裏面に下記の応募券（ポスターと書いてあるほう）をはり、お申込みください。なおポスターの選択は当方におまかせください。多数の場合は抽せん。

宛先＝〒104　東京都中央区銀座２－６－４
東宝東和株式会社宣伝部「スクリーン」ポスター係

締切＝１月15日（消印有効）

レコード

サントラ盤「キングコングのテーマ」　★50名様



★50名のみなさまに上記のサントラ・シングル盤を差し上げます。ご希望の方は官製ハガキに住所・氏名・年齢・職業と、**「キングコング」サントラ盤希望**、と書いて、ハガキ裏面に下記の応募券（サントラ盤と書いてあるほう）をはり、お申込みください。多数の場合は抽せん。

宛先＝〒100　東京都千代田区有楽町１－２－１
東宝ＴＡＭレコード宣伝部「キングコング」サントラ係

締切＝１月15日（当日消印有効）

子門真人・唄「ガオー！はキングコングの合い言葉」　★50名様



★50名のみなさまに上記の「ガオー！はキングコングの合い言葉」（子門真人・唄）のレコードを差し上げます。ご希望の方は住所・氏名・年齢・職業と、**子門真人レコード希望**、と書いて、ハガキ裏面に下記の応募券（子門真人と書いてあるほう）をはり、お申込みください。多数の場合は抽せん。

宛先＝〒100　東京都千代田区有楽町１－２－１
東宝レコード宣伝部「キングコング」レコード・プレゼント係

締切＝１月15日（当日消印有効）

ご注意　応募はおひとり各１通に限ります。応募券のはってないものは無効。宛先がそれぞれ違いますので、おまちがえのないように！

応募券 スクリーン サントラ盤

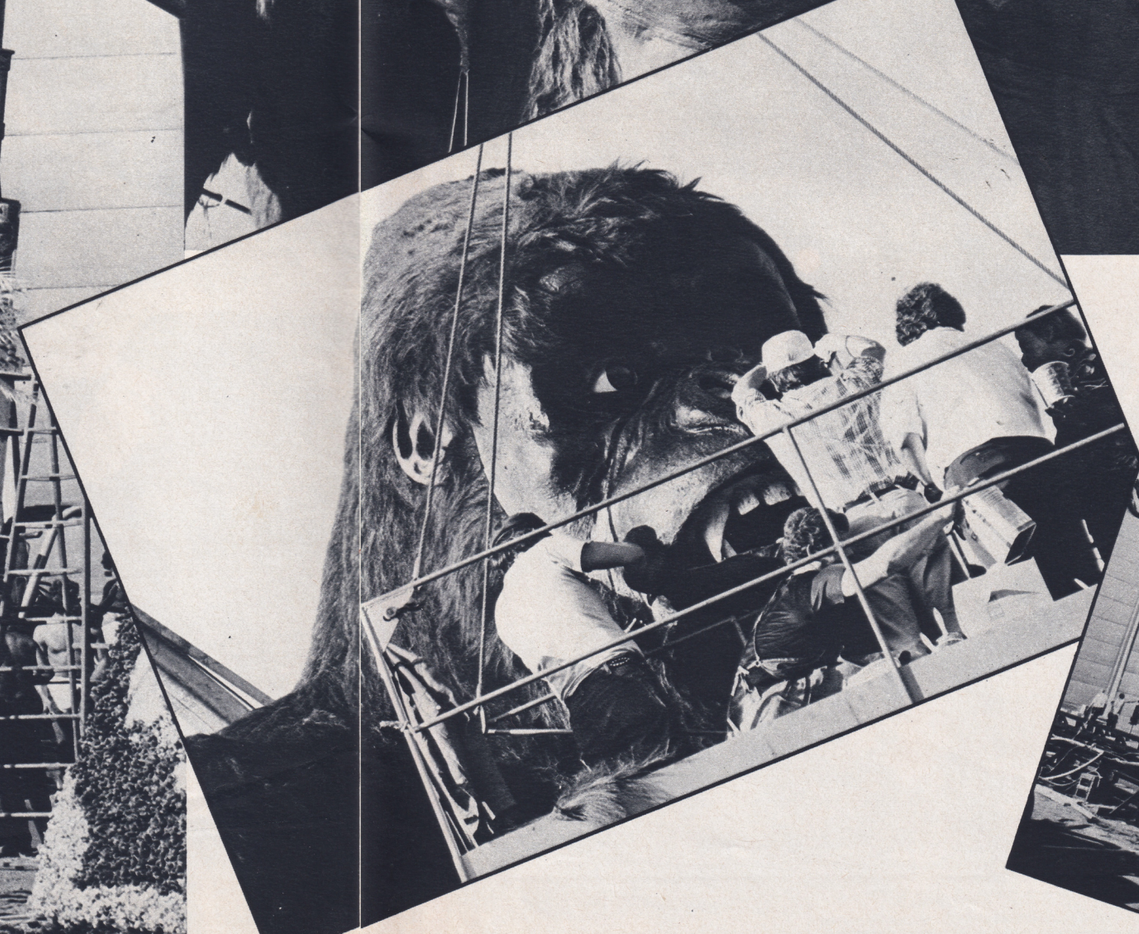
応募券 スクリーン 子門真人

応募券 スクリーン ポスター

キングコングの製作費だけでなんと 300万ドル（邦貨9億円）というから、映画史上はじめての大怪物だ。とにかくコング専用の技師達の週給が30万ドル（9000万円）以上、コングの内部にアミの目のようにはりめぐらされた水圧ホースの長さが1000メートル、同じく電線が1600メートル、からだに植える毛だけで7万8000ドル（邦貨2340万円）という、ビックリするような数字がズラリと並ぶ。それもそのはず、働く人間に比べて、コングのデッカイこと……。









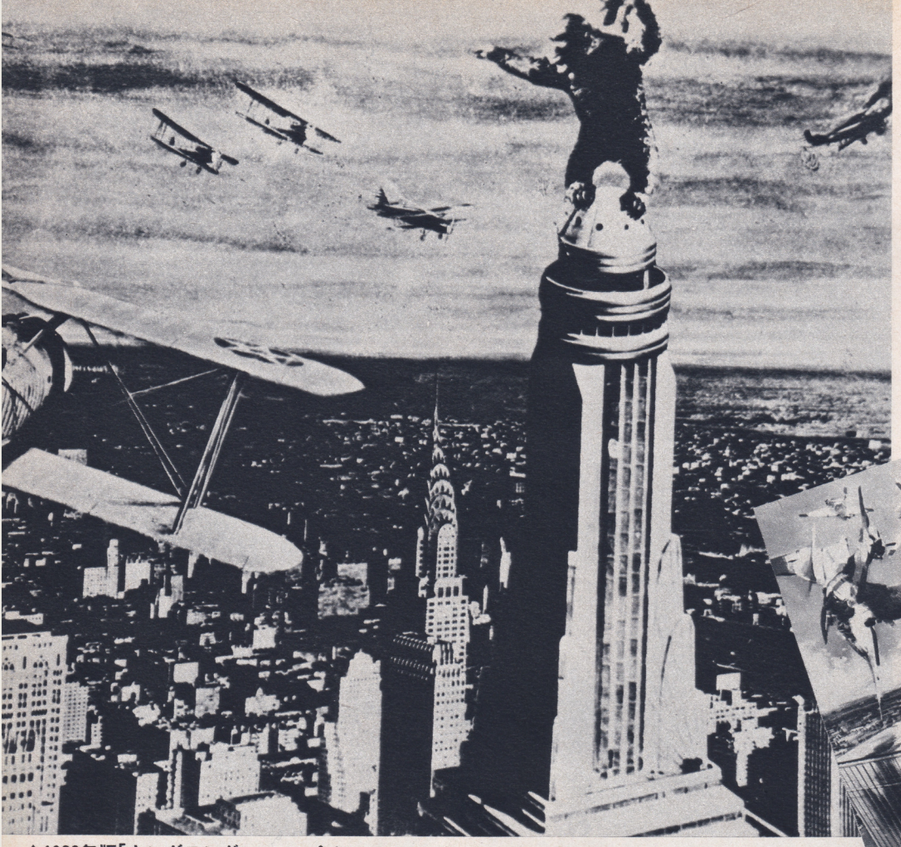




キングコング六つの謎

●特別読物

笞見有弘



↑1933年版「キングコング」。エンパイア・ステート・ビルで大奮戦のコング。





ニューヨークのコング

ニューヨークにいるあいだ、毎日のようにグリニッチ・ビレッジの名画座にでかけていた。劇場を出て、地下鉄に乗るため、アベニュー・オブ・ジ・アメリカンの方へ歩いて行くと、右手にエンパイア・ステート・ビル、左手に世界貿易センターのツイン・タワー・ビルが、夜空にきらきらとそびえている。その名画座で、一九三三年版の「キングコング」を見た帰りなんかは、最高だった。

いま見たキングコングは、右手のビルに登ったけれど、こんどは左手のビルに登るんだなあ。この二つのビルの差が、きっと二つの映画の違いなのだなあ。

一九三三年版ができたとき、エンパイア・ステートは世界一の高さだった。ビルの完成が一九三一年だから、二年後に映画がとりいれたことになる。ところが一九七三年に世界貿易センターが竣工して、ニューヨークーを抜かれた（世界一は今ではシカゴのシアーズ・ビルである）。七三年から三年たって、新「キングコング」の誕生だから、前作とビル竣工の関係とほとんど同じだ。

物好きなぼくは、両方のビルの下から、しげしげと見あげた。ああ首が痛い。エンパイアはアール・デコ調で、上の方は細くなり、塔のようになっている。でこぼこがあるからコングも登りやすかったのだろう。貿易センターの方は、窓ガラスを大きくとってあるのでツルツルした感じだ。新コングはうまく登れるのだろうか。

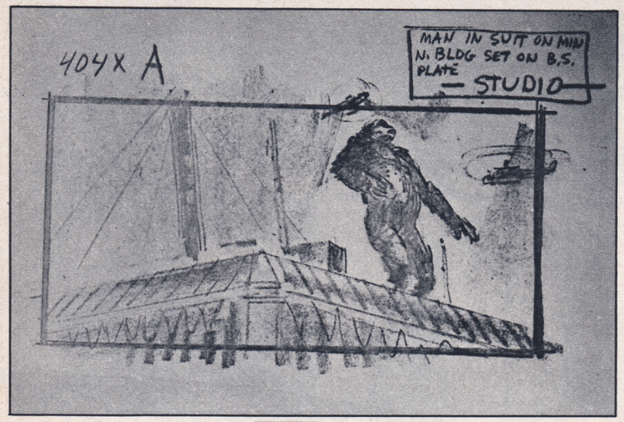
これはよけいな心配だった。こんど来日したジョン・ギラーミン監督にそんな質問をしたら、ヘンなこと考えるヤツもいるものだ、とでもいうように笑いながら「貿易センター・ビルの方が窓ワクがでっぱってて登りいいのだよ」と答えてくれた。

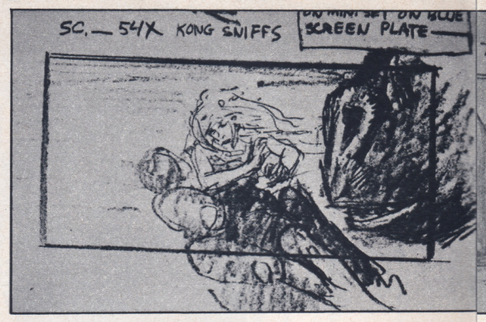
それにしても二つあるビルのうち、どちらへ登るのだろうか、とまた余計なこと考えていたけど、新作の試写を見て、ナルホドとうなった。南側のビルへ登り、北側のビルへ、ひょいと飛び移るではないか。アイデアが気にいった。

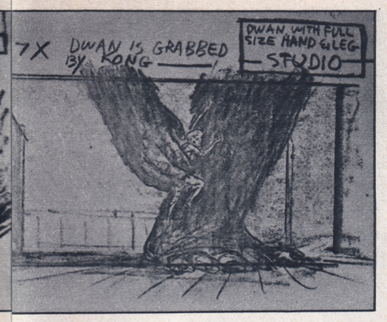
それから、新作ではキングコングがなぜ摩天楼に登るのか、じつに理論的におしえてくれる。コングのふるさと髑髏島にそびえる二つの岩山と、ツイン・ビルがそっくりのかっこうをしているからだ。文明を嫌い、ふるさとの島にあこがれるコングの思いなのである。

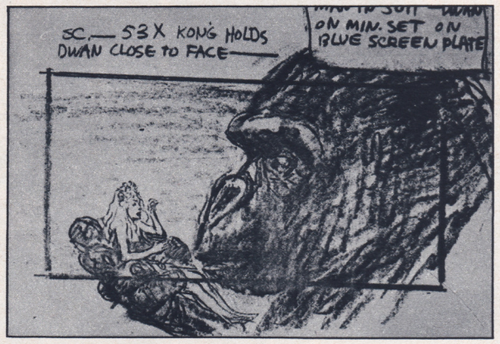
そんなわけで、ぼくにとっては、キングコングというと、新旧ニューヨークーのビルがただちに思いうかんでくるのであるが、同じようなことを考える人もいるもので、久保田二郎という奇妙な論理をもてあそぶ人が、二つのビルの距離を地図の上でコンパスで計り、コングは何歩で歩いたんだろうなんて、計算している。とても愉快だった。

撮影用の絵コンテ







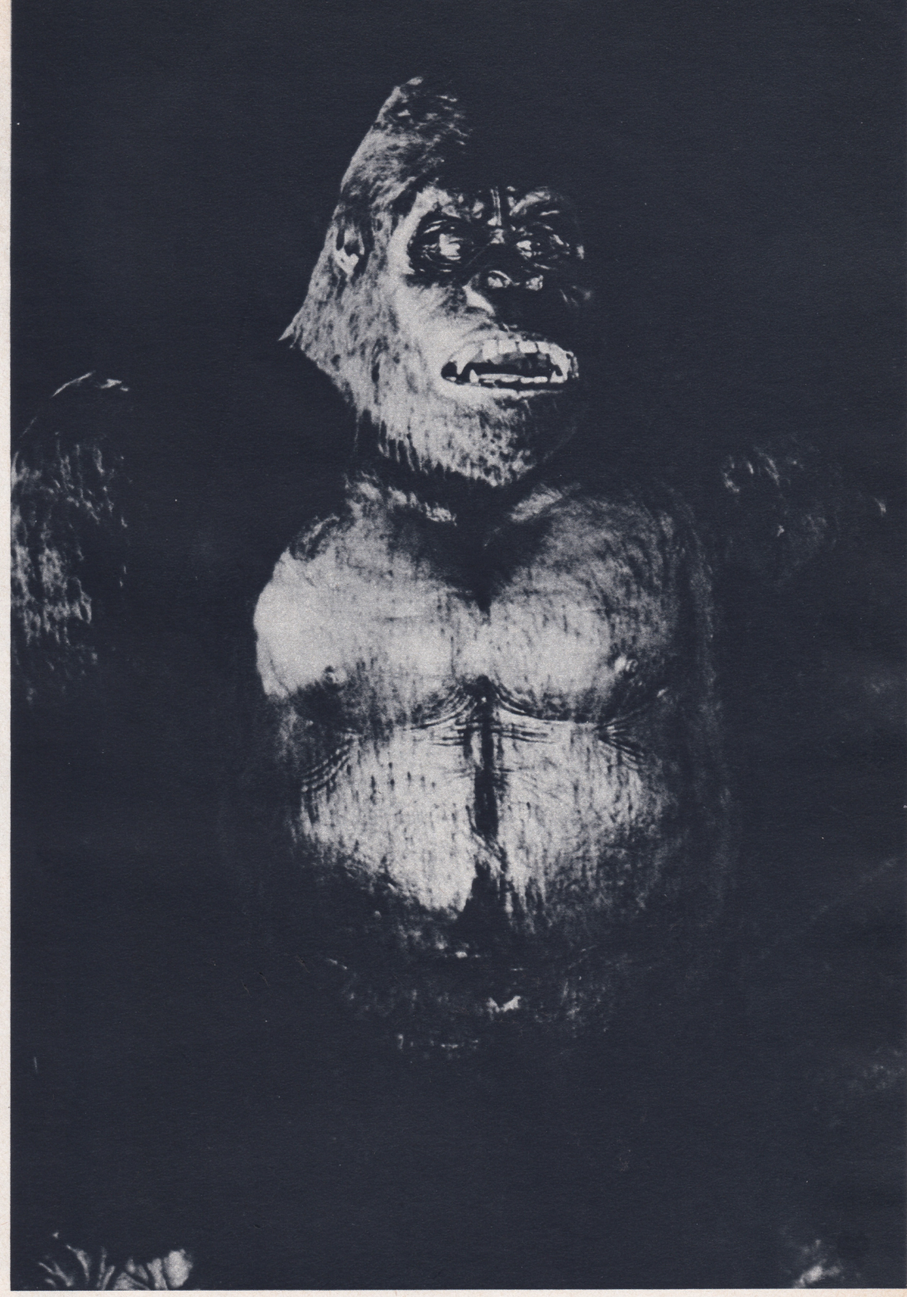












「キングコング」の仲間たち

ぼくにとってのキングコングはニューヨークだが、コング自身はニューヨークが大嫌いだった。そしてコングの創造者たちも、南海のどこかにある髑髏島にむしろひかれていたのではないかと思われる。

キングコングの創造者の一人は、ウィリス・オブライエンという男である。まだ映画が誕生してまもないころから、この男は、粘土で恐竜をつくり、それを一コマ写しては、ちょっと動かし、また写す、というストップ・アクションの仕事をこつこつやっていた。本来、動いていないものを動かしてみせる、つまり人形（立体）アニメーションの手法である。

恐竜をあつかったいくつかの短編がつくられ、観客に喜ばれもしたが、オブライエンの名をいちやく輝やかせたのは、一九二五年に「ロスト・ワールド」の特撮を手がけたときである。これはシャーロック・ホームズで有名なコナン・ドイルの原作の映画化で、ロンドンの学者たちが、ブラジルの奥地にある恐竜の秘境を探検するSFである。恐竜たちが大暴れし、その一頭のプテロダクティル（翼手竜）をロンドンへ持ち帰るが、ロンドンでも暴れだし、街をパニック状態におとしいれる。「キングコング」のストーリーの骨格とじつによく似ているではないか。

オブライエンは、その後、RKOという映画会社で、仲間たちとともに、やはり恐竜の人形アニメーション「創造」をこつこつとつくっていた。ところが、このRKOが大恐慌後の、経営難にであったとき、若手の切れ者デビッド・O・セルズニックが製作担当副社長として乗りこんできた。のちに「風と共に去りぬ」をつくるあのセルズニックである。

セルズニックは友人の製作者メリアン・C・クーパーに、現場のチェックにあたらせた。クーパーは、アーネスト・シェードザックと組んで、中央アジアやタイに出むき、「地上」「チャング」といった記録映画をつくっていた製作者兼監督である。「四枚の羽根」という冒険ドラマをつくるためにアフリカへ行ったとき、ゴリラに興味をおぼえ、ゴリラ映画をつくる構想をあたためていたところであった。

そのクーパーは「創造」のテスト・フィルムを見て、自分のゴリラ物のアイデアと、恐竜とを結びつけて、べつの映画をつくろうと考えた。そうだ、恐竜に匹敵するような、いや恐竜よりも強い巨大なゴリラを主人公にしてやろう。じゃあキングコングという名前にしようじゃないか、と提案したのはセルズニックだったともいわれている。

クーパーは、イギリスで売れている探偵作家エドガー・ウォーレスをハリウッドに招いて、シナリオ執筆にあたらせた。ニカ月かかってシナリオは完成したが、不幸なことに一九三二年二月、肺炎で急死してしまったのである。クーパーには、このシナリオに不満が多かったので、ジェームズ・クリールマンと、シェードザック夫人である脚本家ルス・ローズに全面的に書き直させた。ただしウォーレスには敬意を表して、原作エドガー・ウォーレス、メリアン・C・クーパーという名前はちゃんと残しておいた。

つまり「キングコング」は、小説から映画化したものではなく、映画オリジナルなのである。しかし抜け目のないクーパーは、映画公開後に、デロス・W・ラブレースに小説化（ノベライゼーション）させて、出版した。現在、小説「キングコング」の原作にウォーレスとクーパーの名があるのは、そのためである。そして日本で四種類もの翻訳がいっせいに出版されたのは、すでに著作権の期限が切れているからである。

新・旧コングの違い

さて「キングコング」の特撮は、ウイリス・オブライエンが音頭をとる人形アニメ班以下の活躍ですすめられた。人間や実景を撮影したライブ・シーンと、アニメーション部分の合成はことに困難をきわめた。背景にスクリーンをおき、その前で人間が演じるのを撮影するリア・プロジェクションだとか、ライブとアニメをダブらないようにはめこむマット・プロセスだとかが考案され、開発された。

監督にあたったのはクーパー自身とシェードザックであるが、撮影所内ではクーパー、ニューヨークなどのロケではシェードザックが指揮をとった。クーパーはここでも抜け目がなく、前作「猟奇島」でつかったジャングルをそのまま応用したりしている。製作費八十五万ドル、といっても見当がつかないが、当時の超大作のなかではベラボーな数字ではなかった。

一九三三年三月、「キングコング」は公開され、大ヒットとなった。日本でも昭和八年に封切られ、記録的な当りをしめしている。

「キングコング」のストーリーの骨格は、新作も旧作をほとんどかわりはない。髑髏島へ着いた一行が、原住民からキングコングへのいけにえとして、ヒロイン（旧作でアン・ダロウ、新作ではドワン）を要求されるが応じない。夜、船上からヒロインは原住民たちに誘拐され、コングへのいけにえとされる。やがてあらわれたコングは、この美女に異常なほど愛情をしめす。ヒロインの恋人（旧作ではジョン・ドリスコル、新作ではブレスコット）がようやく彼女を助けだし、コングを生け捕りにする。一行のキャプテン（旧作ではカール・デナム、新作ではウイルソン）がコングをニューヨークへ連れて行き、見せ物にするが、写真のフラッシュで暴れだし、街をパニックにおとしいれたあと、ヒロインをにぎって摩天楼の頂上へ登るが、飛行機との闘いに破れて、遂落する。

大きな違いは、この島へ出かける動機である。前作ではカール・デナムは、メリアン・C・クーパーそっくりのヤマっ気たっぷりの記録映画の監督で、不況下で食べ物さえ買えない娘アン・ダロウを救いだし、映画のヒロインにするからと船に乗せるのである。恐人ドリスコルは船員である。

これに対して、新作は、石油会社の幹部ウイルソンが、油田をもとめてひそかに調査船をすすめるのである。（旧作のデナムが製作者クーパーに似てるのもおかしいが、新作のアメリカでの配給元であるパラマウントの親会社がガルフ・アンド・ウエスタンなる石油中心のコングロマリットであることもおかしい。それはともかく）恐人ブレスコットは、島の謎をとこうとする動物学者で、密航して船に乗りこむ。そこへ、たった一人だけ奇跡的に助かった香港で映画に主演するために渡航中だった彼女はアメリカでの配給元であるパラマウントの親会社がガルフ・アンド・ウエスタンなる石油中心のコングロマリットであることもおかしい。それはともかく）恐人ブレスコットは、島の謎をとこうとする動物学者で、密航して船に乗りこむ。そこへ、たった一人だけ奇跡的に助かったドワンが漂流してくるのである。ここであきらかなように、新作は、現代的、合理的、科学的に改変していて、ビルの頂上のコングを射撃する飛行機もヘリコプターになっているし、ベトナムで使われた最新の兵器が火を噴いたりする。

しかし、旧作にあって新作にないいちばん重要なものは、恐竜たちである。旧作は二つのヤマ場に分れていて、前半の島では、救助隊が恐竜におそわれ、ついでコング対恐竜の死闘がたっぷり盛りこまれている。登場する恐竜を順にならべれば、ステゴサウルス（剣竜）、ブロントサウルス（雷竜）、テイラノサウルス（暴君竜）、プレシオサウルス（蛇頸竜）、プテラノドン（翼竜）である。オブライエンたちの苦心で、これらの恐竜がじつにたくみにできていたことはともに、これら恐竜をつぎつぎ打ち倒すからこそ、〝キング〟なのであった。そして、ダロウのために闘うからこそ、いとおしいのであった。

こうしてあきらかなことは、一九三三年版の「キングコング」の意図と、テーマの一つが、恐竜にあったことである。今回の作品はそれを無視したところに成立している。



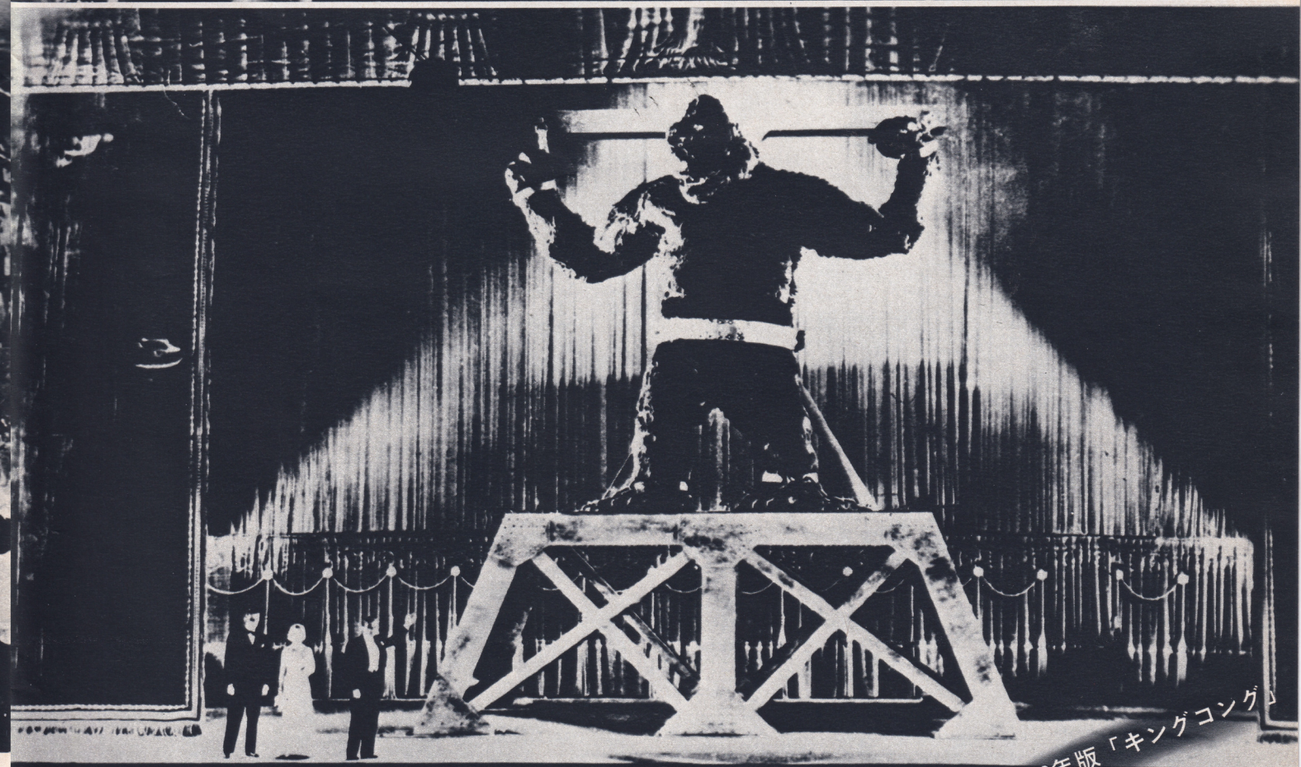






上の4枚・1933年版「キングコング」

★1976年版「キングコング」



★1933年版「キングコング」



↑1933年版「キングコング」





↑一九三三年版「キングコング」



美女と怪獣

旧「キングコング」の大ヒットを、一九二九年にはじまった大不況下の欲求不満現象と結びつける説がある。たしかに、この説はただしいだろう。巨大な怪獣が、つぎつぎと強敵をやっつけ、ニューヨークでは文明の象徴であるビルや地下鉄の高架線を破壊していくのであるから、いらだたしい日常のウサを晴らすにはかっこうの題材であった。

しかし、「キングコング」は今回にいたるまでくりかえし、くりかえし上映され、そのつど人気をあつめている。ということは、この映画が見せ物として、じつにうまく出来ているからに他ならない。ぼくも、新作の製作が発表されてから三度も一九三三年版を見たのであったが、キングコングの大きさが場面によって異ったり、合成シーンがあきらかにそれとわかったりする点をのぞけば、申しぶんなくよく出来ている。

さらに、「キングコング」は、見る人によって、さまざまなテーマをひきだすこともできる。一つのテーマは〝美女と怪獣〟である。「ノートルダムのせむし男」やジャン・コクトオの映画「美女と野獣」をもちだすまでもなく、野獣や怪獣が美女に思いを寄せて、ついに身を滅ぼすという主題は、永遠のものである。自分の分身を怪獣のうちに見出すからである。

一方、〝原始と文明〟というテーマをよみとる人もいる。キングコングは南洋の髑髏島という未開の土地で安住の生活をしていた。ところが文明の最先端をゆく大都会では、コングは死すしかない。コングがふるさとの岩山をなつかしんで登っていった摩天楼は、じつは文明のシンボルであった。現代人の心にも文明を嫌い、原始や未開を憧憬する心がありはしないだろうか。キングコングはその代弁者である、というのである。

一九六〇年代の半ばごろから、「キングコング」を題材にした単行本や雑誌の特集が、フランス、イギリス、アメリカでつぎつぎと出版されている。「キングコングの製作」のように、映画誕生までのいきさつ、特撮の苦心談、種あかしをした本もあるが、一方では「キングコング」論をまじめに展開させた一種の研究も多い。〝キングコング学〟とでもいったものが生まれてしまったのである。

重要なことは、この映画が映画として生まれたということだ。小説や伝説や舞台の映画化ではない。あの巨大な猿という発想は、純粋に映画独自のものであり、そのことに気づいた製作者やアニメーターたちの生み出しだものなのである。そして、恐竜をスクリーンで動かしてみたいという夢と、これは同じ線上に育ったものである。

一九三三年版の「キングコング」が傑作であるかどうかはべつにして、偉大なる映画的遺産であることはいうまでもない。

ダロウを演じたフェイ・レイ、デナム役のロバート・アームストロング、ドリスコル役のブルース・キャボットは、それぞれ映画的なキャリアを持っているにもかかわらず、「キングコング」の主演者として名前を記憶されることになった。ことにフェイ・レイは、映画のなかで泣き叫ぶ以外にほとんどセリフがなく、演技らしい演技もみせないというのに〝キングコングの毛むくじゃらのでのひらに抱かれた女優〟としてイメージを定着させられてしまった。



3枚とも「猿人ジョー・ヤング」

コングの息子、孫(?)

「キングコング」大ヒット後、ただちにRKOとクーパーは続編の製作を開始し、同じ年の秋にはもう公開させてしまった。「コングの復讐」がそれである。この日本題名はすこしばかり誤解をまねくおそれがある。キングコングはエンパイアの頂上から墜落死してしまったわけだから、息子の小コングの出番となったのである。だから原名は「コングの息子」なのである。

前編と共通して登場するのはロバート・アームストロング演じるデナムと、フランク・ライシャーふんする船長だけである。あのキングコングのふるさと髑髏島に莫大な財宝がかくされていることを知ったデナムは、ふたたび島へ渡る。流砂に落ちて溺れかかっている小コングを助けたことから、小コングは大熊と闘うたりしてデナムを助けるが、最後には海底の岩に足をはさまれて沈んでしまういったストーリー。

キングコングという怪獣のイメージはすっかり消え去り、名犬ラッシーとか、ああいうジャンルに属する忠実な動物ものに堕してしまった。アイデア自体があまりに貧弱だったのである。おまけに前半では、前作のニューヨークのクライマックス・シーンをたっぷり使い、島へ渡ってからも特撮が効力を発揮するようなところはほとんどない。

これではオブライエンが嫌気をしめすのはあたりまえで、特撮の現場には弟子のバズ・ギブスンをもっぱらあたらせ、自分はあまり協力しなかった。クレジット・タイトルからも名前をはずすよう要請したが、クーパーが承知しなかったというエピソードもある。興行的にも〝息子〟は〝親コング〟をはるかに下まわった。

クーパー製作、シエードザック監督、オブライエン特撮のトリオは、一九三五年の史劇「ポンペイ最後の日」でも協力しあったし、オブライエンはミュージカル映画の特撮なども手がけたが、三人の夢は、恐竜やキングコングを再現することにあった。いくつかの企画を練ったりもしたが、戦争でクーパーが従軍したりして、ひとつも実現しなかった。

戦後、復員したクーパーは、ジョン・フォード監督と組んでアーゴシー・プロを設立し、「アパッチ砦」「黄色いリボン」「静かなる男」などフォードの名作を発表したが、コングを復活させることも忘れなかった。すなわち、シエードザック監督、オブライエン特撮で〝コング二部作〟の最後にあたる「猿人ジョー・ヤング」を一九四九年に製作したのである。

こんども、やはりロバート・アームストロングが主演しているが、ハリウッドのナイトクラブ経営者の役で、前二作とは関係のない人物である。おもむく先きもアフリカで、巨大なゴリラ、ジョー・ヤングを生け捕りにしてクラブの見せ物にするが、ジョー・ヤングは大暴れ、しかし物わかりのいいゴリラで、孤児院の火事から子供たちを救出するというストーリーである。

ゴリラがここまで心やさしい性格になってくると、もう興奮度がうすれてしまう。第一作「キングコング」がいかにとびぬけたアイデアをもっていたか、今さらのようにわかってくる。しかしオブライエンはこの作品でアカデミー特殊効果賞を獲得した。といっても、一九三三年当時にはアカデミーにこの賞がなかっただけの話である。また、この作品ではレイ・ハリーハウゼンという特撮にとび抜けた関心をしめし、技術ももっている青年が、オブライエンに協力した。というより、オブライエンは安心して、ハリーハウゼンに、人形のストップ・アクションをまかせたという。ハリーハウゼンは、その後幾多の仕事を残し、この分野のすぐれた後継者となった。

しかし、「猿人ジョー・ヤング」はヒットせず、クーパーは続けて予定していた「ジョー・ヤング、ターザンに会う」をあわてて中止したほどであった。その後、クーパーはシネラマ社の副社長に就任すると、「これがシネラマだ」の巻頭シーンを、シエードザック監督、オブライエンの特撮で担当させたが、三人の夢はシネラマの超大型画面でキングコングを再現することにあったようだ。

だがそのうちシネラマ社そのものが危機となり、これも夢に終った。クーパー、シエードザックにとっては、これが最後の映画経歴となり（シエードザックはまだ健在である）、オブライエンは「動物の世界」「黒い蝮」「ロスト・ワールド」の再映画化（日本題名「失われた大陸」）などの特撮を担当したが、輝やかしい仕事は残せなかった。「おかしな、おかしな世界」で車が建物に飛び込む特撮シーンを最後に、この立体アニメーションにとりつかれた男は、一九六二年、七十六歳で死んだ。

新「キングコング」

「キングコング」復活の気運が再燃したのは、一九七三年ごろからのことである。「恐竜時代」で特撮を手がけたイギリスのジム・タンフォースなども企画したようだが、「ポセイドン・アドベンチャー」「タワーリング・インフェルノ」「ジョーズ」とつづくパニック映画過熱状態のなかで、アメリカのメジャー（大会社）が名乗りをあげた。一つは〝ポスト「ジョーズ」〟をねらうユニバーサル社で、「サブウェイ・パニック」のジョゼフ・サージェントに監督させようというもの。もう一つは、イタリアから乗りこんできてハリウッドに本拠地をかまえたディノ・デ・ラウレンティスがパラマウントと提携してつくろうというもの。

映画化権をめぐって両者のあいだに争いが生じ、七五年秋には法廷斗争にもちこまれた。だが、解決を待たずにラウレンティス側はひそかに準備をととのえ、七六年一月にはハワイのカウアイ島ロケまですすめてしまったのである。一月末に裁判の結果がでたが、ラウレンティス版公開後、十八カ月間、ユニバーサル版は公開できないという判決であった。その後、ユニバーサルはとりやめてしまったのか、さっぱりニュースを聞かないが、いまさらつくっても話題に乗りおくれてしまうことはあきらかだ。ただし、ユニバーサル版は、時代も一九三〇年代、クライマックスはエンパイア・ステート・ビル、話の運びはほとんどオリジナル版どうりだったということで、その再映画化もまた楽しみではあったのだが……。

さて、新「キングコング」だが、前に書いたように、ストーリーの骨格はほぼ同じでありながら、出来上った作品のもつ味わいは、だいぶ違っている。その最大の違いは、四十数年前にくらべて、特撮技術がいちじるしく進歩したことからきているのではないかと思われる。

とりわけコングの顔の表情が、微妙で豊富なのである。眼やくちびるはもちろんのことまばたきもするし、鼻をうごかし、息をふくとき頬もふくらませる。エレクトロニクスで操作しているというふれこみだが、まるでメカニズムを感じさせない。つまり、コングの感情や心理がこちらにつたわってくるのである。

観客ばかりにでなく、ヒロインのドワンにもつたわる。ドワンは、はじめのうちこそコングをおそれはするが、コングがぜったい自分を傷つけないと知ると、いちいち反応をしめす。これはコングと美女との間の愛にまで発展する。

そのコングが、都会文明のまっただなかへつれてこられ、結局、死なねばならなくなるのである。来日したジョン・ギラーミン監督とインタビューしたとき、こんどの「キングコング」はパニック映画ではなく、ロマンチックな映画であるとしきりに強調していたが、なるほど〝新〟コングの誕生であり、そこが面白かった。

「キングコング」カラーハイライト 第2部 KING KONG



「キングコング」大特集号

目次

「キングコング」カラー・ハイライト	富田　健二	9
ここが「キングコング」の見どころだ！	双葉十三郎	26
映画物語「キングコング」	東　和男	32
「キングコング」はこうして完成した！	関　建二郎	36
「キングコング」イラスト傑作集		41
「キングコング」むかしといま		50
「キングコング」を作った人たち		52
レコードで「キングコング」を楽しもう		54
“キングコング”はこうして作られた！		57
“キングコング”6つの話題	筈見　有弘	62
監督・主演女優にインタビュー	筈見　有弘	40
レコードとポスター大プレゼント！		56

「キングコング」こぼればなし

コング誕生の秘密

この映画の製作者ディーノ・デ・ラウレンティースが「キングコング」の製作を思いついたのは二年前……。

当時十五歳の娘フランチェスカを毎朝起こすのが彼の役目だった。いつものことでふだんは気がつかなかったがある日、起こしてもなかなか起きてこないので二度目に行ったとき、娘の部屋の壁に旧作の「キングコング」のポスターがはってあるのに気がついた。「これだ！〝コング〟を再映画化しよう」

こうして世紀の大作「キングコング」は、ふたたびよみがえったのである。

〝コング〟で家が建った!?

コングに愛される美女ドワン役は、最初バーブラ・ストライサンドが予定されていた。だが彼女は契約寸前で断わり、別の女優が選ばれたが、いざ撮影に入ろうという時、おなかが大きくなって（つまり妊娠中）だめ。結局、ジェシカ・ラングが晴れの栄冠をかちえた。彼女はそれまでヒッピーふうの生活を送っていたが、この「キングコング」のギャラの一部で、両親に家をプレゼントしたそうだ。

●「キングコング」を数字で見れば…

- **製作費**　2500万ドル（邦貨75億円）
- **コング本体の製作費**　300万ドル（9億円）
- **封切都市及び館数**
  - 世界で2200都市・2700館
  - 日本で109都市・175館
- **日本における配給収入予想**　60億円
- **日本における宣伝費**　3億円
- **ユニバーサルからラウレンティースへの慰謝料請求**　2500万ドル（75億円）
- **ラウレンティースからユニバーサルへの慰謝料請求**　900万ドル（270億円）

スクリーン1月号臨時増刊

「キングコング」大特集号

定価490円　送料53円

昭和52年1月5日発行　第32巻第2号通巻421号

発行所　株式会社近代映画社　発行人＝小杉益二郎　編集人＝尾河照三

〒105　東京都港区西新橋2－7－4　第20森ビル

TEL．営業部専用(591)7101　編集部専用(591)8235

KING KONG

クサリにつながれているとはいえ、コングのすさまじいうなり声は、集まった観客たちを驚かせた。そして、予想もしない恐ろしいことが…

つないでおいたクサリが切れ、ついにコングが暴れ出したのだ。会場はパニック状態におちいった。野性にかえったコングの威力はすさまじい。電車はつぶれ、ビルがふっ飛んだ。

KING KONG

KING KONG

大地をゆるがせながらコングは必死に何かを捜していた。相手はドワンだ。
ドワンを求めて怒り狂ったコングは、あらゆるものを破壊して行った。

さしもの大都市ニューヨークもコングの前にはひとたまりもない。全市に非常警戒がしかれ、軍隊も出動し空と陸から攻撃を開始した。炎に包まれながらコングはマンハッタンに向かった。

KING KONG

超高層ビルがそびえ立つマンハッタンの一角に世界貿易センター・ビルがある。コングはそのビルに登った。島の岩山に思えたのだろうか。——攻撃はますます激しく、さすがのコングも次第に弱って行った。

KING KONG



超高層ビルの屋上に立ちはだかり、襲いかかる飛行機をたたき落としたコングだったが、ついに力つき、最後の時を迎えた。地上411メートルのビルから、まっさかさまに墜落したのだ。



KING KONG

KING KONG



身長20メートルの巨体をコンクリートの冷たい舗道に横たえて、コングはカッと目を見ひらいたまま死んでいた。大群衆がこの巨獣の最後を見ようと、その回わりを取り囲んだ。だが、コングが愛したドワンだけは流れ落ちる涙をふこうともせずいつまでも立ちすくんでいた。

●●●●絶賛発売中の2大青春映画小説●●●●

楡の木陰の愛

G・L・カルデローネ／V・チェラミ岡枝慎二・訳

ある時は湖上に、ある時は滝のほとりに、相寄り、結ばれようとしてためらい、白い裸身をもだえさせて性に悩む若い恋人たち……マーク・レスター主演の評判青春映画の完全小説化！ただいま全国有名書店で好評発売中！



若き日の性のとまどい

新書刊 ¥680 〒160

小さな恋のメロディ

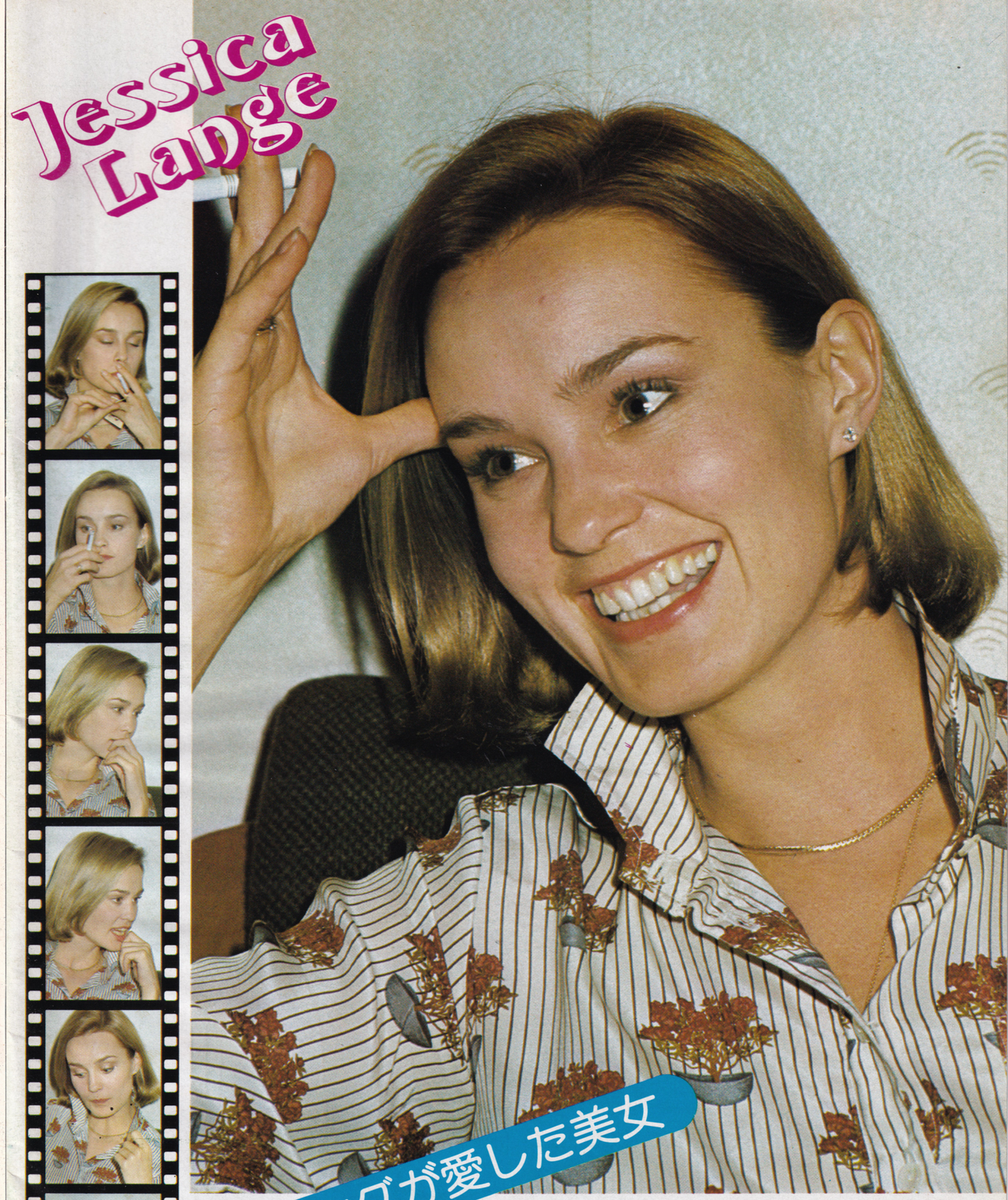
アラン・パーカー　桐山洋一・訳

トロッコに乗って野原の彼方に消えて行ったダニエルとメロディ……あのかわいい恋の映画の楽しい原作小説です。あなたの胸にいつまでも残る思い出のために、ぜひお買い求めください。第8版出来！　残部僅少

B6判 ¥690 〒160

近代映画社　〒105 東京都港区西新橋2－7－4　第20森ビル

★ご注文はお近くの書店へ。品切れの節は誌名を明記し、誌代・送料を現金書留または郵便振替（東京4・195330）で本社営業部あてお申込みください。



コングが愛した美女

ジェシカ・ラング

映画の中でただひとりキングコングに愛される女性ドワンを演ずるジェシカ・ラングが、さる11月15日、宣伝のためジョン・ギラーミン監督と来日、日本のファンに美しい笑顔と肢体をご披露した。

KING KONG



スクリーン1月号臨時増刊
昭和52年1月15日発行　毎月1回1日発行　昭和22年4月24日第3種郵便物認可
2662号　昭和51年12月3日国鉄首都増刊号承認第9619号
第32巻第2号通巻421号
昭和51年3月26日国鉄首都特別扱い認可雑誌第
東京・西新橋　近代映画社発行

雑誌 5406－1　PRINTED IN JAPAN　定価490円 〒53

